

宮沢賢治の世界

注文の多い料理店と

風の又三郎

はじめに

まず、宮沢賢治の『注文の多い料理店』の全体は、「序」と「九編の作品」から成るものであるが、その中でも、最も有名な『注文の多い料理店』と『序』についての本文に添った考察になっています。——また、宮沢賢治は、最初、『風野又三郎』という作品を書き上げ、そのあと、その「作品」に手を加えて、今日、誰でもよく知っている、いわゆる『風の又三郎』にしたということである。それゆえ、まさに『風野又三郎』という作品と『風の又三郎』という作品の、この「二つの作品」の本文に添った考察になっています。さらに、『風の又三郎』という作品の中には、有名な『種山ヶ原』と『さいかち淵』という、この「二つの作品」が組み込まれていますので、その「二つの作品」についてのごく「簡単な考察」も行ない、そして、宮沢賢治は、なぜ、風の子「風野又三郎」から人間の子「風の又三郎」へと書き換えたのか？ その最大の「謎解き」になっていますので、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和元年五月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

はじめに

注文の多い料理店

- 一、 山奥で…
- 二、 西洋料理店
- 三、 五つの扉とびら
- 四、 結び
- 五、 序

風野又三郎

- 一、 九月一日（夏休み明けの学校）
- 二、 九月二日（栗の木の下で）
- 三、 九月三日（今年もやって来た）
- 四、 九月四日（サイクルホール）
- 五、 九月五日（中華気象台ちゅうか）
- 六、 九月六日（枝葉の雫しずくを降らす）
- 七、 九月七日（世界に風などなくていい）
- 八、 九月八日（北極への大循環）
- 九、 九月九日（北極から南下へ）
- 十、 九月十日（嵐の朝）
- 十一、 どつどつ……

風の又三郎

- 一、 九月一日（夏休み明けの学校）
- 二、 九月二日（様々な授業風景）
- 三、 九月四日（高原と馬追い）
- 四、 種山ヶ原たねやま（高原と牛はら）
- 五、 九月六日（葡萄とりと雫ぶどう）
- 六、 九月七日（泳ぎと発破はっぱ）
- 七、 九月八日（毒もみと鬼っこ）
- 八、 九月十二日（風雨の朝）
- 九、 結び

※ 参考文献

注文の多い料理店

注文の多い料理店

例えば、宮沢賢治の『注文の多い料理店』という作品は、日本では誰でもよく知っている有名な「児童文学」であるが、それは、世界的にも非常に有名な『不思議の国のアリス』という「児童文学」などともどこか似たようなところがあるのかも知れない。

例えば、有名な『不思議の国のアリス』という作品の場合には、少女アリスは、土手の木の下で本を読んでいると、なんとチョッキを着たウサギを見かけ、思わずそのウサギの後を追いかけていくと、ウサギは、やがてウサギの穴に入り、アリスもそのウサギの穴に入って下まで落ちて行くと、そこで現実とはまた違った様々な「不思議な経験」をするという内容になっているかと思う。——一方、宮沢賢治の『注文の多い料理店』という作品も、二人の若い「紳士」と一人の専門の「猟師」（鉄砲打ち）が二疋の猟犬を連れて深い山奥まで「狩り」に出かけるが、その深い山奥で道に迷ってしまい、やがて、その案内人の「猟師」（鉄砲打ち）もどこかにいなくなり、さらに、連れていた「二疋の猟犬」も、その余りの山奥の「物凄さ」から、口から泡を吐いて死んだような状態になってしまい、その後（ここから）、二人の若い「紳士」は、現実とはまた違った、まさに「不思議な経験」をするという物語になっているかと思う。

一、山奥で

それでは、その本文の「冒頭」であるが、それは、「……二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二疋つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを言いながら、歩いておりました。それは、ここの山はけしからんね、鳥も獣も一疋も居やがらん。早くタンタアーンと、やって見たいもんだなあ」とある。——まず、「……二人の若い紳士、イギリスの兵隊のかたち、そして、ぴかぴかする鉄砲」とあるので、恐らく、狩りの経験のあまりない「狩人」気取りの「紳士」たちであり、また、「……鳥も獣を一疋も居やがらん」というのは、或いは、「山猫」がそのように魔法をかけているのかも知れない。というのも、プロの「案内人」（猟師）が、まさか「……鳥も獣も一疋も居ない」ようなところに、わざわざお客さまを連れて行くはずがないからである。

また、「……案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちよつとまごついて、どこかへ行ってしまったくらい」の山奥でした。それに、あんまり山が物凄いのので、その白熊のような犬が、二疋いっしょにめまいを起して、しばらく吠つて、それから泡を吐いて死んでしまいました」とある。——しかし、その山を熟知している案内人の「猟師」（鉄砲打ち）が道に迷うはずもなく、また、犬の「死に方」にしても、あまりに「不自然」であり、それは、「猟師」（鉄砲打ち）というのは、最悪の場合、自分が撃ち殺される危険性の極めて高い存在であり、それゆえ、どこかに消えてもらう必要がある、また、二疋の猟犬にしても、「山猫」にとつては、まさに「天敵」であり、それゆえ、しばらく眠つてももらう必要があるということである。（それはもちろん、若い紳士「二人」だけにするためである。）

それでは、これらは、一体、何を意味しているのかと問えば、それは、次のようなこと

である。つまり、現実とはまた違う、まさに「異次元」の世界へと迷い込んだということである。——それは、有名な『不思議の国のアリス』の場合でも全く同じことであり、ここでは、例えば、様々な動物たちが人間の言葉を当たり前のようにしゃべったり、また、人間と同じような「言動」などを行ったりするものである。それは、マンガやアニメ或いは絵本、その他などでは、今日、あまりにも当たり前前の「世界」になり過ぎていっているほどであるが、しかし、現実にはあり得ない話なのである。

もちろん、それこそ、まさに「ファンタジー」ということであるが、それでは、その「ファンタジー」は、一体、どこから生じて来るのかと問えば、それはもちろん、われわれ人間の「頭の中」(或いは「心の中」)からであり、それは、われわれ人間の「思考(思索)能力」(つまり「人間の脳」)が持ち合わせている「空想(想像)能力」の素晴らしさであり、われわれ「人間の脳」というのは、現実を遙かに超越した「超次元的思考」が何の苦もなく平気ででき得るということであり、例えば、過去、現在、未来という、まさに「時空」を、あつという間に自由自在に「行き来」でき得る「タイムマシン」を持ち合わせているとともに、例えば、イヌやネコ或いは他の動物や植物、時には、人工物までが、まるで人間のように平気で言葉をしゃべったり、また、われわれ人間と対等に会話をするというような、そういう、われわれ人間の「思考(思索)能力」(つまり「人間の脳」)が持ち合わせている、現実を遙かに超越した「超次元的思考」が何の苦もなく平気ででき得るということが、結果として、今日のようなかなり高度な「文化・文明」などを築き上げることを可能にして来た「最大の理由」の一つにもなるのである。

二、西洋料理店

さて、「話」(ストーリー)は、次のように展開して行く。つまり、二人とも道に迷い、心細くもなり、今日の「猟」はやめて帰ろうとするが、一体、どっちの方向に向かって帰ればよいのか分からないという状態の時に、まさに「……風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごとんごとんと鳴りました」とある、この「自然の変化」を契機として、二人は、まさに「異次元の世界」(それは「魔法がかかったような世界」)へと迷い込んでいくのであり、それは、「……腹が減って、動くのも嫌だ」というような、そういう「心理的状态」へとよりなっていくことである。

そして、ふと後ろを見ると、(今まで何もなかった所に、突然として)、二人の後ろに立派な一軒の「西洋造りの家」があった、という展開になる。そして、その「玄関」には、「……RESTAURANT、西洋料理店、WILDCAT HOUSE、山猫軒」という札が出ていました、とある。これは、非常に「面白い内容の札」であり、なぜなら、わざわざご親切にも自分たちの「正体」を示すような「……WILDCAT HOUSE、山猫軒」という札を出しているからである。しかし、もちろん、二人の「紳士」たちは、それに気づくこともなく、また、恐らく、読者もそれに気づかず、軽く読み流してしまうのではないかと思う。——それは、まさに「まさか？」なのである。まさか「WILDCAT」本人がみずから経営するレストラン(HOUSE)であるなどとは、誰も思いも寄らないことなのである。

そこで、二人の「紳士」たちは、よかったと思いつつ、「玄関」の前に立ち、その硝子

の「開き戸」を見ると、そこには「金文字」で次のように書いてある。それは、「……どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません」と。——これは、本来であれば、「……決してご遠慮は入りません」と書くべきところかと思うが、なぜ、「……遠慮はありません」というような曖昧な表現になっているのだろう。それは、主人（山猫）の「言葉遣い」のぎこちなさとともに、もう一つは、「……（決して）遠慮などせずお客様をお食べしますよ」という「意味合い」をも含めているのかも知れない。——一方、二人の「紳士」は、それを「ただでござ馳走してくれるんだ」と解釈して、戸を押して、中に入ると、廊下が続いている。その硝子戸の裏側には、金文字で、「……ことに肥ったお方や若いお方は、大歓迎いたします」と書いてある。それを見た二人は、両方を兼ねていたので「大喜び」して、「……ずんずん廊下を進んでいくと、こんどは水いろのペンキ塗りの扉がありました」という展開になるのである。

三、五つの扉

さて、ここから「五つの扉」が続くことになる。そして、その一つ一つの「扉」の「表側と裏側」には、それぞれ「注文」が書かれてあるという展開であり、若しも最後の六番目の「扉」まで開けて中に入って行けば、そこには「山猫」がナイフとフォークを持って待機していて、そのまま「山猫」に食べられてしまうという内容である。

まず最初は、水色のペンキ塗りの「扉」であるが、その「扉」の表側には、「……当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」と黄色い字で書かれてある。二人は、「……なかなかはやってるんだ」と思いながら、扉を開けると、その「扉」の裏側には、「……注文はぜひぶん多いでしょうがどうか一々こらえて下さい」と書かれてある。それに対して、一人の紳士は、なにかおかしいなあと感じながらも、もう一人の紳士の、その、何でもよい「意味合い」に解釈する人とともに、前へと進んでいく。

次は、二番目の「扉」になるが、わきに鏡がかかって、下には長い柄のブラシが置いてあり、その「扉」には「赤い字」で、「……お客さまがた、ここで髪をきちんとして、それからききものの泥を落してください」と書いてある。これには素直に従い、髪を整え、泥を落としてから、扉を開けると、今度は、その「扉」の裏側には、「……鉄砲と弾丸をここへ置いてください」と書いてある。二人は、それもそうだなと納得して、黒い台の上にそれらを置き、前へと進む。そして、次の三番目の「黒い扉」の表側には、「……どうか帽子と外套と靴をおとり下さい」とあり、これも素直にその通りにしてから、「扉を開けると、今度は、その「扉」の裏側には、「……ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類、ことに尖ったものは、みんなここ（金庫の中）に置いてください」とある。この「注文」に対しても、二人は、素直に従う。そして、四番目の「扉」の前には、硝子の「壺」が一つあり、そして、「……壺のなかのクリームを顔や手足にすっきり塗ってください」と書かれてあり、その通りに塗って、扉を開けると、その「扉」の裏側には、「……クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか」と書いてある。ここまでの「注文」は、一方の紳士は、何かおかしいなあと直感的に感じながらも、もう一人の紳士の、何でもよい「意味合い」に「解釈する」（つまり「理窟を述べる」）人に従って、一緒に前へと進んでいくが、次の五番目の「注文」に対しては、さすがに二人ともその「意

味するところ」をはっきりと理解することになるのである。

それでは、その五番目の「扉」であるが、その五番目の「扉」の表側には、「……料理はもうすぐできます。十五分とお待たせはいたしません。すぐたべられます。早くあなたの頭に瓶の中の香水をよく振りかけてください」と書いてあるので、その通りにすると、その「瓶の中」の香水というのは、何と酸っぱい味がして、これは下女が間違えて入れたんだらうと言いながら、扉を開けると、その「扉」の裏側には、「……いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。もうこれだけです。どうかからだの中に、壺の中の塩をたくさんよくみ込んでください」と書いてあるのを見ては、さすがに二人とも、これは、自分たちが味付けされた「料理品」として食べられるのだとはっきりと知ることになるのである。その瞬間、二人ともがたがたと震えはじめ、泣き出してしまった。しかも、最後に残った六番目の「扉」の表側には、「……いや、わざわざご苦労です。大へん結構にできました。さあさあおなかにはいりください」と書いてあり、おまけに「……かぎ穴からはきよるきよる二つの青い眼玉がこつちをのぞいているのであった」とある。ここに至っては、すべてのことを知ることになるのである。

その時、突然、「ワン、ワン」と、死んだはずの「二疋の猟犬」（或いは新しい「二疋の猟犬」が勢いよく部屋に入ってきて、くるくる廻っていたが、次の六番目の「扉」までも押し開けて中に入り込むと、その扉の向うのまっ暗やみのなかで、「にやあお、くわあ、ごろごろ」という声が出て、奥にいたであろう「山猫」は、逃げ出していき、今まであった「室」も、煙りのように消えてしまうという展開になっていく。そして、「……見ると、上着や靴や財布やネクタイピンなどは、あっちの枝にぶら下がったり、こつちの根元に散らばったりしている。風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました」とある。——それらを契機に、再び、「現実の世界」に戻ったということであり、猟師もやってきて、その猟師が持ってきた「だんご」を食べ、二人は、「……途中で十円だけ山鳥を買って東京に帰りました」というところで終わっているのである。

四、結び

さて、これらは、一体、どういうことを意味しているのだろうか。まず、われわれ人間は、自分が「食べ物」として調理されるというようなことは、現実にはほとんどないことであるが、しかし、人間以外の「動物たち」（特に「家畜や魚介類或いは農作物」など）は、世界中のありとあらゆるところで、毎日、毎日、絶えることもなく、人間の「食べ物」として調理されているものである。しかも、食べられる動物たちの「気持ち」などは、ふつうほとんど考えることもないかと思う。——もちろん、それは、われわれ人間が生き続けるためには、どうしても避けては通れない「現実」であり、それは、それで仕方ないことではあるが、しかし、若しも自分がほかの「動物たち」に食べられる立場に立ってみれば、それは、例えば、登場人物の若い二人の「紳士」たちのように、まさに「がたがた震えて、泣き叫ぶようなパニック状態に深く陥ってしまう」のではないかと思う。つまり、それは、何であれ、例えば、「勝つ側」と「負ける側」、「する側」と「される側」、そして、「食べる側」と「食べられる側」、その他、それらは、必ず「対」になっているもの

であり、あとは、自分がどちら側の立場に立つのか、或いは、どちら側の立場になるのかが残されているだけである。そして、われわれ人間は、どうしても「自分の立場」から物事は考えやすく、一方、相手の立場に立って物事を考えるということは、なかなかできにくいものであるが、しかし、できるだけ様々な「立場」（視点）から厳密に考えてみなければ、より正しい「判断」というものは、なかなかでき難いということである。

さて、宮沢賢治の有名な『注文の多い料理店』という作品内容は、ふつうわれわれ人間が「食べる側」であり、一方、動植物たちが「食べられる側」という、あまりにも一般化し過ぎたその「図式」が、まさに「大逆転した形」であり、それは、われわれ人間が「食べる側」ではなく、むしろ、われわれ人間が「食べられる側」に立った時の「衝撃」（ショック）であり、例えば、トラやライオン或いはワニやサメ、その他の「動物たち」に食べられる時の「衝撃」（ショック）は、一体、どれほどのものだろうか？ 宮沢賢治は、その「衝撃」（ショック）を、「本文」では、次のように表現している。それは、「……二人はあまりに（も）心を痛めたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙屑かみくずのようになり、お互いにその顔を見合わせ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました」とある。それに加えて、本文の「最後」には、「……さっきのペン紙かみくずのようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯に入っても、もう元の通りになおりませんでした」とある。

これは、一体、どういうことなのか？ 宮沢賢治は、一体、何が言いたいのだろう。それは、次のようなことである。——つまり、われわれ人間は、ふだん実に様々な「動植物」たちをいろいろと「調理」をして、ごく当たり前のように食べているが、しかし、「食べられる側」（それは「命を奪われる側」）に立てば、それは、大変な「出来事」であり、また、いわゆる「狩り」の場合なども、それがどうしても必要な場合であれば、仕方ないが、しかし、単なる気晴らしや面白半分面白半分の「狩り」であれば、当然のことながら、宮沢賢治は、それに対して、はつきりと「批判的であった」に違いなく、それは、面白半分で、銃で「生命を奪う」ということ、それは、自分が「撃たれる側」（つまり「命を奪われる側」）に立てば、登場人物の若い二人の「紳士しんし」たちのように、はつきりと分かるだろうということである。つまり、「……一ぺん紙くずのようになった二人の顔が、もう元にもどらない」というのは、その「衝撃」（ショック）のあまりの「大きさ」とともに、安易に命を奪う「罪深さ」などを物語るものであり、そして、もう一つは、「……どういふことであれ、相手の立場に立ってみなければ、ほんとうのことは、何一つ分らない」ということである。

五、序

さて、宮沢賢治の『注文の多い料理店』の序は、次のようなものであるが、それは、「……わたしたちは、氷砂糖こしょうをほしくらいもたないでも、きれいにすきとおった風かぜをたべ、桃ももいろのうつくしい朝あさの日光をのむことができます。またわたたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろろや羅紗らしやや、寶石くわんせきいりのきものに、かわっているのをたびたび見ました。わたたくしは、そういうきれいなたべものやきものがすきです。これらのわたたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路てつどうせんろやらで、虹にじや月あかりからもらってきたのです。ほんとうに、かしわばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかったり、十一月の山の嵐あらしのなかに、ふるえながら立ったりしますと、もうどうしても

こんな気がしてしかたないので、ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようでしたかたないということ、わたくしはそのとおり書いたままです」とある。

*

*

つまり、これらの「作品」は、宮沢賢治の「頭の中」(或いは「心の中」)に自然と生じて来たものばかりであり、それゆえ、ことさらに意図的に作り出したような作品ではないということである。例えば、都会や町の中などに住んでいる人たちにとって、いわゆる百%純粋な「自然の音」などを聞くというような機会は、ほとんどなく、ほとんどの場合、様々な「人工的な音」などが入り混じった「自然の音」を聞いているわけである。ところが、宮沢賢治の場合は、まさに百%純粋な「自然の音」そのものを聞いていたということである。そして、宮沢賢治の数多くの「作品」の中には、実に様々な「擬音語」や「擬態語」(つまり「オノマトペ」)などが使われているが、それらは、基本的には、すべて宮沢賢治の「頭の中」(或いは「心の中」)に自然と生じて来たものであり、それゆえ、ことさらに意図的に作り出したようなものではないのだろう。

例えば、『風の又三郎』の冒頭の「風の音」である、「……どつどど どつどど どどどど どどど」という表現にしても、「序」の言葉を借りて解釈すれば、それは、「……十一月の山の嵐のなかに、ふるえながら立ったりしますと、もうどうしてもこんなことがあるようではないということ、ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようではないということ、わたくしはそのとおり書いたままです。(中略)、なんのことだか、わけのわからないところもあるでしょうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。……」とある。つまり、本人にもよくわからないまま、宮沢賢治という人間の「頭の中」(或いは「心の中」)に自然と生じて来たものであり、それゆえ、ことさらに意図的に作り出したようなものではないということである。それは、一体、何を意味するのかと敢えて問えば、それは、宮沢賢治という人間の、まさに根源的な「心のリズム」の表れであり、また、根源的な「心(魂)の音」の表れでもあり、また、宮沢賢治という人間の、まさに根源的な「感情(情動)」の表れでもあり、また、根源的な「思考(思索)」の表れでもあるということである。……

*

*

参考文献（注文の多い料理店）

二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二疋つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを言いながら、あるいておりました。「……ぜんたい、ここらの山は怪しからんね。鳥も獣も一疋も居やがらん。なんでも構わないから、早くタンタアンと、やって見たいもんだなあ。」「……鹿の黄色な横つ腹なんぞに、二三発お見舞もうしたら、ずいぶん痛快だろかねえ。くるくるまわって、それからどたと倒れるだろかねえ」と。

それはだいたいの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちよつとまごついて、どこかへ行ってしまったくらいのも山奥でした。それに、あんまり山が物凄いのので、その白熊のような犬が、二疋いっしょにめまいを起こして、しばらく吠つて、それから泡を吐いて死んでしまいました。「……じつにぼくは、二千四百円の損害だ」と一人の紳士が、その犬の眼ぶちを、ちよつと返して言いました。また、「……ぼくは二千八百円の損害だ」と、もひとり、くやしそうに、あたまをまげて言いました。

はじめの紳士は、すこし顔を悪くして、じつと、もひとりの紳士の顔つきを見ながら言いました。「……ぼくはもう戻ろうと思う」。すると、もう一人も、「……さあ、ぼくもちよつと寒くはなつたし腹は空いてきたし戻ろうと思う」と言う。そこで、「……それじゃ、これで切りあげよう。なかに戻りに、昨日の宿屋で、山鳥を拾円も買って帰ればいい」と言う。もう一人も、「……兎も出ていたねえ。そうすれば結局おんなじこつた。では帰ろうじゃないか」と言うのであった。

*

*

ところが、どうも困ったことは、どっちへ行けば戻れるのか、いっこうに見当がつかなくなっていました。(その時)、風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。「……どうも腹が空いた。さつきから横つ腹が痛くてたまらないんだ。」「……ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな。」「……あるきたくないよ。ああ困つたなあ、何かたべたいなあ。」「……喰べたいもんだなあ」と、二人の紳士は、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことを言いました。その時、ふとうしろを見ますと、立派な一軒の西洋造りの家がありました。そして玄関には、「……RESTAURANT 西洋料理店 WILDCAT HOUSE 山猫軒」という札がでていました。「……君、ちよつどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入ろうじゃないか。」「……おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができるんだらう。」「……もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじゃないか。」「……はいろいろじゃないか。ぼくはもう何か喰べたくて倒れそうなんだ」と言うのであった。

一、玄関の扉

二人は玄関に立ちました。玄関は白い瀬戸の煉瓦で組んで、実に立派なものです。そして硝子の開き戸があつて、そこに金文字でこう書いてありました。「……どなたもどうか

お入りください。決してご遠慮はありませぬ」と。二人はそこで、ひどくよろこんで言いました。「……こいつはどうかだ、やっぱり世の中はうまくできてるねえ、きょう一日なんぎしたけれど、こんどはこんないこともある。このうちは料理店だけれどもただで馳走するんだぜ」。「……どうもそうらしい。決してご遠慮はありませぬというのはその意味だ」。——二人は戸を押し、なかへ入りました。そこはすぐ廊下になっていました。その硝子戸の裏側には、金文字でこうなっていました。「……ことに肥ったお方や若いお方は、大歓迎いたします」と。二人は大歓迎というので、もう大よろこびです。「……君、ぼくらは大歓迎にあたっているのだ」。「……ぼくらは両方兼ねてるから」と言うのであった。

二、第一の扉

ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水色のペンキ塗りの扉がありました。「……どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう」と言うと、「……これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ」と言う。そして、二人はその扉をあけようとし、上に黄色な字でこう書いてありました。「……当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」と。すると、「……なかなかはやってるんだ。こんな山の中で」と言うので、「……それあそつだ。見たまえ、東京の大きな料理屋だつて大通りにはすくないだろう」と、二人は言いながら、その扉をあけました。するとその裏側に、「……注文はすいぶん多いでしょうがどうか一々こらえて下さい」とある。「……これはぜんたいどういうんだ」と、ひとりの紳士は顔をしかめました。「……うん、これはきつと注文があまり多くて支度が手間取るけれどもごめん下さいと斯ういうことだ」と言うので、「……そうだろう。早くどこか室の中に入りたいたいもんだな」と言うと、「……そしてテーブルに座りたいもんだな」と言うのであった。

三、第二の扉

ところがどうもうるさいことは、また扉が一つありました。そしてそのわきに鏡がかかって、その下には長い柄のついたブラシが置いてあったのです。扉には赤い字で、「……お客さまがた、ここで髪をきちんとして、それからきもの泥を落してください」と書いてありました。「……これはどうも尤もだ。僕もさつき玄関で、山のなかだとおもつて見くびったんだよ」と言うと、「……作法の厳しい家だ。きつとよほど偉い人たちが、たびたび来るんだ」と言うのであった。そこで二人は、きれいに髪をけずって、靴の泥を落しました。そして、どうです。ブラシを板の上に置くや否や、そいつがぼうつとかすんで無くなって、風がどうつと室の中に入ってきました。二人はびっくりして、互によりそつて、扉をがたんと開けて、次の室へ入って行きました。早く何か暖いものでもたべて、元気をつけて置かないと、もう途方もないことになってしまうと、二人とも思つたのでした。扉の内側に、また変なことが書いてありました。「……鉄砲と弾丸をここへ置いてください」と。見るとすぐ横に黒い台がありました。「……なるほど、鉄砲を持つてものを食うという法はない」。「……いや、よほど偉いひとが始終来ているんだ」と言いながら、

二人は鉄砲をはずし、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。

四、第三の扉

また黒い扉がありました。「……どうか帽子と外套と靴をおとり下さい」とある。「……どうだ、とるか」と聞くので、「……仕方ない、とろう。たしかによっぽどえらいひとなんだ。奥に来ているのは」と言いながら、二人は帽子とオーバーコートを釘にかけ、靴をぬいでぺたぺた歩いて扉の中に入りました。扉の裏側には、「……ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類、ことに尖ったものは、みんなここに置いてください」と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありました。鍵まで添えてあったのです。「……ははあ、何かの料理に電気をつかうと見えるね。金気のものはおぶない。ことに尖ったものはおぶないと斯う言うんだろう」と言う、「……そうだろう。して見ると勘定は帰りにここで払うのだろうか」と言う、「……どうもそうらしい」と言い、「……そうだ。きつ」と、二人はめがねをはずしたり、カフスボタンをとったり、みんな金庫のなかに入れて、ぱちんと錠をかけました。

五、第四の扉

すこし行きますとまた扉があつて、その前に硝子の壺が一つありました。扉には斯う書いてありました。「……壺のなかのクリームを顔や手足にすっかり塗ってください」と。みるとたしかに壺のなかのものは牛乳のクリームでした。「……クリームをぬれというのはどういうんだ」と聞くと、「……これはね、外がひじょうに寒いだろう。室のなかがあんまり暖いとひびがきれるから、その予防なんだ。どうも奥には、よほどえらいひとがきている。こんなとこで、案外ぼくらは、貴族とちかづきになるかも知れないよ」と言い、二人は壺のクリームを、顔に塗って手に塗ってそれから靴下をぬいで足に塗りました。それでもまだ残っていましたから、それは二人ともめいめいこっそり顔へ塗るふりをしながら喰べました。

それから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、「……クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか」と書いてあつて、ちいさなクリームの壺がここにも置いてありました。「……そうそう、ぼくは耳には塗らなかつた。あぶなく耳にひびを切らすとこだった。ここの主人はじつに用意周到だね」と言う、「……ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところでぼくは早く何か喰べたいんだが、どうも斯うどこまでも廊下じゃ仕方ないね」と言うのであつた。

六、第五の扉

するとすぐその前に次の戸がありました。「……料理はもうすぐできます。十五分とお待たせはいたしません。すぐたべられます。早くあなたの頭に瓶の中の香水をよく振りかけてください」と。そして、戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。二人はその香水を、頭へぱちやぱちや振りかけました。ところがその香水は、どうも酔のような匂

がするのでした。「……この香水はへんに酔くさい。どうしたんだろう」と言うと、「……まちがえたんだ。下女が風邪でも引いてまちがえて入れたんだ」と言うのであった。

二人は扉をあげて中にはいりました。扉の裏側には、大きな字で斯う書いてありました。「……いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。もうこれだけです。どうかからだ中に、壺の中の塩をたくさんよくもみ込んでください」と。なるほど立派な青い瀬戸の塩壺は置いてありましたが、今度という今度は二人ともぎよつとしてお互にクリームをたくさん塗った顔を見合せました。「……どうもおかしいぜ」。「……ぼくもおかしいと思う」。「……沢山の注文というのは、向うがこつちへ注文してるんだよ」。「……だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人にたべさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやる家とこういうことなんだ。これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……」がたがたがたがた、ふるえだしてもうものが言えませんでした。「……その、ぼ、ぼくらが、……うわあ」と、がたがたがたがたふるえだして、もうものが言えませんでした。「遁げ……」がたがたしながら一人の紳士はうしろの戸を押そうとしましたが、どうです、戸はもう一分も動きませんでした。

七、第六の扉

奥の方にはまだ一枚扉があつて、大きなかぎ穴が二つ付き、銀色のホークとナイフの形が切りだしてあつて、「……いや、わざわざご苦労です。大へん結構にできました。さあさあおなかにおはいりください」と書いてありました。おまげにかぎ穴からはきよきよる二つの青い眼玉がこつちをのぞいています。「……うわあ」がたがたがたがた、「……うわあ」がたがたがたがた、ふたりは泣き出しました。すると戸の中では、こそそこそんなことを言っています。「……だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないんだよ」。「……あたりまえさ。親分の書きようがまずいんだ。あすこへ、いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう、お気の毒でしたなんて、間抜けたことを書いたもんだ」。「……どつちでもいいよ。どうせぼくらには、骨も分けて呉れやしないんだ」。「……それはそうだ。けれどももしこへあいつらがいって来なかつたら、それはぼくらの責任だぜ」。「……呼ぼうか、呼ぼう。おい、お客さん方、早くいらつしやい。いらつしやい。いらつしやい。お皿も洗つてありますし、菜っ葉ももうよく塩でもんで置きました。あとはあなたがたと、菜っ葉をうまくとりあわせて、まっ白なお皿にのせるだけです。はやくいらつしやい」。「……へい、いらつしやい、いらつしやい。それともサラダはお嫌いですか。そんならこれから火を起してフライにしてあげましょうか。とにかくはやくいらつしやい」と言うのであった。

八、突然、犬が……

二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙屑のようになり、お互にその顔を見合せ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。

中ではふつふつとわらつてまた叫んでいます。「……いらつしやい、いらつしやい。そ

んなに泣いては折角のクリームが流れるじゃありませんか。へい、ただいま。じきもってまいります。さあ、早くいらっしやい。」「……早くいらっしやい。親方がもうナフキンをかけて、ナイフをもつて、舌なめずりして、お客さま方を待っていられます」と言うのであった。

二人は泣いて泣いて泣いて泣きました。そのときうしろからいきなり、「……わん、わん、ぐわあ」という声が出て、あの白熊のような犬が二疋、扉をつきやぶつて室の中に飛び込んできました。鍵穴の眼玉はたちまちなくなり、犬どもはううとううなつてしばらく室の中をぐるぐる廻つていましたが、また一声、「……わん」と高く吠えて、いきなり次の扉に飛びつきました。戸はがたりとひらき、犬どもは吸い込まれるように飛んで行きました。——その扉の向うのまっくらやみのなかで、「……にやあお、くわあ、ごろごろ」という声が出て、それからがさがさ鳴りました。

九、結び

室はけむりのように消え、二人は寒さにぶるぶるふるえて、草の中に立っていました。見ると、上着や靴や財布やネクタイピンは、あちの枝にぶらさがったり、こっちの根もとにちらばったりしています。風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。犬がふうとうなつて戻ってきました。そしてうしろからは、「……旦那あ、旦那あ」と叫ぶものがあります。二人は俄に元気がついて、「……おおい、おおい、ここだぞ、早く来い」と叫びました。簑帽子をかぶった専門の猟師が、草をざわざわ分けてやってきました。そこで二人はやつと安心しました。

そして猟師のもつてきた団子をたべ、途中で十円だけ山鳥を買って東京に帰りました。しかし、さつき一ぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯に入っても、もう元の通りに治りませんでした。(完)

*

*

風野又三郎

「風野又三郎」について

例えば、宮沢賢治の有名な『風の又三郎』という作品は、誰もがよく知っている宮沢賢治の「代表的な作品」の一つであるが、しかし、その「風の又三郎」には、もう一つの『風野又三郎』という作品があるのを知っている人は、意外と少ないのではないかと思う。それは、一体、どういうことかと言え、それは、最初、宮沢賢治は、『風野又三郎』という作品を書き上げ、そのあと、その「作品」に手を加えて、今日、われわれの誰もがよく知っている、『風の又三郎』にしたということである。

*

*

それでは、まず、『風野又三郎』から考えてみたいと思うが、この「作品」は、次のようなものである。つまり、主人公である「風野又三郎」というのは、文字通り、まさに「風の子供」であり、それゆえ、親兄弟叔父さんその他もいる「風の家族」の一員であり、その「風の家族」は、一年中、まさに「世界中」をずっと風を吹かせながら「旅」（旅行）をしていて、日本へは、毎年、九月一日の二十日から二十日までやって来ているという設定になっている。そして、日本で風の神を「風の三郎」と呼ぶ地域は、新潟、長野、福島、山梨、静岡などの甲信越地方から東北地方にかけて広がっている。そして、風祭かぜまつりのほとんどが「風鎮め」であり、しかも、その「風」は、一般には「台風」（或いは「強い風」）のことであるが、それには、次のようなはつきりとした理由があるからである。

つまり、主人公の「風野又三郎」という「風の子供」は、次のように語っている。つまり、「……僕たちのやるいたずらで一番ひどいことは日本ならば稲を倒すことだよ、二十日から二十二十日ころまで、昔はその頃ほんとうに僕たちはこわがられたよ。なぜってその頃は丁度稲に花のかかるときだろう。その時僕たちにかげられたら花がみんな散ってしまつてまるで実にならないだろう、だから前は本当にこわがったんだ、僕たちだってわざとするんじゃない、どうしてもその頃かけなくちゃいかないからかけるんだ、もう三四日たてばきつと又そうなるよ。けれどもいまはもう農業が進んでお前たちの家の近くなどでは二十十日のころになど花の咲いている稲なんか一本もないだろう、大抵もう柔らかやわくな実になつてゐるんだ。早い稲はもうよほど硬くかたさえなつてゐるよ、僕らがかけあるいて少し倒れたつてそんなにひどくとりいれが減りはしないんだ」とある。

すなわち、「自然界」というのは、本来、どこまでも「不気味で恐ろしいもの」であり、それゆえ、例えば、海であれ、山であれ、川であれ、空であれ、その他、何であれ、ひとたび本気で荒れ狂つたら、人間などひとまりもないものである。だからこそ、われわれ人類は、遙か遠い大昔から、様々な「自然」を「神」として崇め、祭り、生け贄や供え物などをし、歌ったり、踊ったりして、その「機嫌」を伺いながら、まさに「自然の驚異」を「鎮めてきた」ということである。そして、「風」（強風）もまた人間に脅威を及ぼす存在として、まさに「神」（風の神）として崇め、祭り、風祭などを行なつて、風による様々な「被害」などの無いことを切に願つて来たのである。

つまり、古来、日本において、「……毎年、九月一日の二十日から二十日まで」は、いわゆる「台風襲来」の多い時期とされていて、それゆえ、今日でも、台風、地震、その他の、まさに「防災の日」と制定されているのである。そして、今年も、九月一日の二十日に、主人公である「風野又三郎」は、再び、日本にやってきたという想定である

が、それを本文で見ると、まず、子供の一人が、「……又三郎さんは去年も今頃ここへ来たか」と聞くと、又三郎は、「……去年は今よりも少し早かったろう。面白かったねえ。九州からまるで一飛びに馳けて馳けてまっすぐに東京へ来たろう。(中略)、それからその晩、夜どおし馳けてここまで来たんだ」とある。だとすれば、これは、まさに「強い風」(つまり「台風」と一緒にやって来たということであり、そして、「……今年だって二百二十日になったら僕は又馳けて行くんだ」とあるが、それは、九月十日(つまり「二百二十日」)の早朝、強い風や雨などの降る(嵐の中)、風野又三郎は、(一郎に別れを告げて)、再び、飛び去って行くのである。——それでは、まず、本文の「冒頭」から見たいと思うが、それは、次のようなものである。

本文の「冒頭」

どっどどどどどど どどどどど どどどど
ああまいぎくろも吹きとばせ
すっぱいぎくろもふきとばせ
どっどどどどどど どどどどど どどどど

谷川の岸に小さな四角な学校がありました。

学校といっても入口とあとはガラス窓の三つ付いた教室が一つあるきりではかには溜りも教員室もなく運動場はテニスコートくらいでした。

先生はたった一人で、五つの級を教えるのでした。それは、みんなでちょうど二十人になるのです。三年生はひとりもありません。

さわやかな九月一日の朝でした。青ぞらで風がどうと鳴り、日光は運動場いっぱいでした。そこに子供たちが登校して来て、最初の二人(一年生)が、ちよつと教室の中を見ますと、まるで顔も知らない赤い髪の子供がひとり一番前の机にちゃんと座っていました。それを見て、一人は、自分の机にその子が座っているの、泣き出し、そして、もう一人の子も泣き出しそうになりました。——一方、教室にいる子は、変てこな鼠いろのマントを着て水晶かガラスか、とにかくきれいなすきとおった沓をはいていました。それに顔と言ったら、まるで熟した苹果のよう殊に眼はまん円でまっくろなのでした、とある。そして、この子供こそは、まさに風の子「風野又三郎」にほかならないのである。

*

*

それでは、なぜ「髪の毛」は、「赤い色」なのだろうか？ それは、結局のところ、「人間」ではなく、いわゆる「風の子」だからである。つまり、「人間の子」ではないということとを強調するための、また、人間と区別するための「一つの象徴」になっているのである。例えば、昔話や童話にも、よく「赤鬼」や「青鬼」などが登場して来るが、それでは、なぜ「赤鬼」や「青鬼」なのだろうか？ それは、「鬼」は、「人間」とは違う。その「違い」を強調するために、人間のような「肌色」ではなく、例えば、「赤色」や「青色」、その他の色をしているという、そういう、われわれ人間の「発想」なのである。

それでは、なぜ、「……顔と言ったら、まるで熟した苹果のよう殊に眼はまん円でまっくろなのでした」ということになるのか？ それは、恐らく、「……(風を起こすために)

激しく動き回れば、頬が上気して真っ赤になるし、また、冷たい風に当たれば、頬は冷氣で真っ赤になるというようなイメージからの発想であり、また、台風の際は、丸い黒いというようなイメージからの発想”ではないかと思う。さらに、「……変てこな鼠いろのマントを着て水晶かガラスか、とにかくきれいなすきとおった沓をはいていました」とある。これは、一体、どういうことかと問えば、まず、「変てこな鼠いろのマント」というのは、恐らく、「雲の色」、つまり、「台風」は、「……風だけではなく、当然のことながら、雨も降らせる」ことになるからであり、また、「……水晶かガラスか、とにかくきれいなすきとおった沓をはいていました」とある。これは、「沓」は履いてはいるが、それは、「すきとおった沓」であり、「人間の靴」とは違うということである。特に「すきとおった透明感」を強調しているが、それは、「ガラスのマント」で「空を飛ぶ」というイメージも全く同じことであり、つまり、「……水晶かガラスの沓をはき、ガラスのマントで空を飛ぶ」というイメージは、やはり「すきとおった透明感」をことさらに強調しているが、それは、一体、なぜかと敢えて問えば、それは、まさに「風には色がない」という「根源的なイメージ」からなのである。

二、九月一日

さて、九月一日の本文の「内容」であるが、それは、「……さわやかな九月一日の朝でした。青ぞらで風がどうと鳴り、日光は運動場いっぱいでした。黒い雪袴をはいた二人の一年生の子がどてをまわって運動場にはいつて来て、まだほかに誰も来ていないのを見て、『ほう、おら一等だぞ。一等だぞ』と、かわるがわる叫びながら大悦びで門をはいって来たのでしたが、ちよつと教室の中を見ますと、二人ともまるでびっくりして棒立ちになり、それから顔を見合せてぶるぶるふるえました。がひとりはどうとう泣き出してしまいました。というわけはそのしんとした朝の教室のなかにどこから来たのか、まるで顔も知らないおかしな赤い髪の子供がひとり一番前の机にちゃんと座っていたのです。そしてその机といたらまったくこの泣いた子の自分の机だったのです。もひとりの子ももう半分泣きかけていました。そこへ他の男の子たちも次から次へと集まり、その一人の嘉助が、「なして泣いでら」と、泣いてない方の子に聞くと、その子も、わあと泣き出してしまいました。——一方、教室にいる子は、ぜんたいその形からが実におかしいのです。変てこな鼠いろのマントを着て水晶かガラスか、とにかくきれいなすきとおった沓をはいていました。それに顔と言ったら、まるで熟した苹果のよう殊に眼はまん円でまっくろなのです」とある。そこに、女の子たちも集まり、最後、六年生の一郎がやって来て、「ただ、時間にならないに教室へはいってるのは」と、窓へはいのぼって教室の中へ顔をつき出して言いました。「……早く出はって来、出はって来」（早く「外に出て来い」と言っても、その変な子はずっと椅子に座ったまままわりを見まわしている様子でした。

そこに先生がいつものきらきら光る呼子笛を持っていきなり出入り口から出てきて、笛を口にあててピルルと吹くと、みんなはきちんと運動場に整列しました。けれども誰の目もみんな教室の中の変な子に向いていました。号令がかかり、順に入り口から入り、教室の中へと入りました。（原稿数枚なし）。先生は、「……みなさん休みは面白かった（です）ね。朝から水泳ぎもできたし林の中で鷹にも負けないくらい高く叫んだりまた兄さんの草

刈りについて行ったりし(まし)た。それはほんとうにいいことです。けれどももう休みは終わりました。これからは秋です。むかしから秋が一番勉強のできる時だといってあるのです。ですから、みなさん今日から又(また)しつかり勉強しましょう」と話をする。すると、生徒の一人が、先生に、「さっきいた変な子は何だったべ」と聞く。すると、先生は、「さっきの子……」と言い、「なんの話みたいな感じ」になっている。これは、一体、どういうことかと問えば、それは、「風の子」というのは、子供たちには「見えて」も、大人の人たちには「見えない」ということなのか？　ここも「以下原稿数枚なし」となっているのでよく分からない。(つまり、本文はここで一度「途絶え」て、突然、次の文章になる。)

*

*

それは、「……あの山にのぼってよくそこらを見ておいでなさい。それからあしたは道具をもつてくるのです。それではここまで」と先生は言いました。みなはもうあの山の上ばかり見ていたのです。そして、「気を付けっ」と一郎が叫び、「礼っ」で、みんなおじぎをするや否(いな)やまるで風のように教室を出ました。それからがやがやその草山(くさやま)へ走ったのです。女の子たちもこっそりついて行きました。けれどもみんなは山にのぼるとがっかりしてしまいました。みんながやっとその栗(くり)の木の下まで行ったときはその変な子は見えませんでした。そこには十本ばかりのたけにぐさが先生の言った通り風にひるがえっているだけだったのです」とある。——これは、恐らく、子供たちが、「あつ、あの山の上(う)にさっきの変な子がいる！」と言ったのに対して、先生は、子供たちに、「そんな変な子なんか見えませんよ。ただたけにぐさが風にひるがえっているだけです。うそだと思(おも)うならば、あの山にのぼってよくそこらを見ておいでなさい」と言ったのである。だからこそ、みんなはおじぎをするや否(いな)やまるで風のように教室を出て、あの草山(くさやま)へと走ったのである。しかし、そこにはもうあの「変な子」はいなかったということである。

そして、小さい方の子供たちは、もうあんまりその変な子(こ)のことがかり考えていたもんですから、もうそろそろ厭(あ)きていました。そしてみんなはわかれてうちへ帰りましたが、一郎と嘉助(かすけ)は仲々(な)それを忘れてしまうことはできませんでした、とある。

つまり、宮沢賢治は、「風の子」というのは、子供たちには「見えて」も、大人の人たちには「見えない」という、そういう「設定」にしようとしたのかも知れない。

三、九月二日

さて、次は「九月二日」であるが、この日は、次のような展開になっていく。それは、「……(六年生の)一郎と五年生の耕一とは、丁度(ごご)午后二時に授業がすんで、いつものように教室の掃除(そうじ)をし、それから二人は一緒に学校の門を出ましたが、その時二人の頭の中は、昨日の変な子供で一杯(いっぱい)になっていました。そこで二人はもう一度、あの小山の栗の木まで行ってみようと相談をして、丘をぐんぐん登って行きました。

ところが、丘の途中(ちゆうちゆう)のところで、ひよつと上の栗の木を見ると、たしかにあの赤毛(あかぬい)の鼠(ねずみ)色のマントを着た変な子が草に足を投げ出し、だまって空を見上げているのです」。(中略)、二人は胸をどきどきさせながら、まるで風のように駆け上がり、二人はやつとその子の前まで来ました。一郎がまだはあはあ言いながら、切れ切れに叫びました。「汝(うな)あ誰(たれ)だ。何だ汝(うな)あ」。するとその子は落ちついて、まるで大人のようにしつかり答えました。

「風野又三郎」。「……どこの人だ、ロシアか」と聞くと、その子は空を向いて、はあはあはあはあ笑い出しました。その声はまるで鹿の笛のようでした。それからやっとまじめになって、「……又三郎だい」と、ぶつきり棒に返事しました。「……ああ風の又三郎だ」と。一郎と耕一とは思わず叫んで顔を見合せました。「……そんだったらあっちこっち飛んで歩くな」と、一郎がたずねました。「うん」と答え、「……面白いかい」と、耕一が聞きました。すると風野又三郎は又笑い出して空を見ました。「うん面白い」と。……

さて、これが『風野又三郎』という作品の、まさに「展開」であり、この後は、毎日、放課後、丘の「栗の木」の下に集まって来る子供たちに、主人公の「風野又三郎」が、風の子として世界中を「旅」（旅行）した時の実に様々な「体験・経験」などを楽しく話をするという内容であり、それらの内容については、本文を読んでもらえばわかるので、ここでは省略をして、大まかな「展開」だけを順を追って取り上げてみたいと思う。

*

*

まず、九月一日に、学校の教室に突然その「姿」を見せるが、いつしか消えてしまい、その日は、岩手山の方に行っていた。それゆえ、子供たちとはまだ一度も正式には「顔合わせ」も「話」もしていない。一方、『風の又三郎』の場合には、まさに「転校生」という設定ですから、先生に紹介され、父親も出席して、みんなと一緒に「夏休み」開きの「ホームルーム」（それは「宿題や通信簿」などの提出）に参加して、それが終わると、父親と一緒に家へと帰るといふ展開になっている。さて、次は、九月二日であり、授業を終えて、学校の門を出た「一郎と耕一」は、昨日の変な子が気になっていて、そこであの小山の栗の木までまた行ってみようと相談して、丘をぐんぐん登って行くと、丘の途中の栗の木の下で、あの赤毛の鼠色のマントを着た変な子が草に足を投げ出しているの、そこまで駆け上がって、その子の前まで来ると、一郎は、まだはあはあ言いながら、「汝あ誰だ。何だ汝あ」と聞く、それに対して、その子は、「風野又三郎」と答える。ここから、まさに風の子「風野又三郎」と「子供たち」との交流が始まるという、そういう展開になっているのである。……

三、九月三日

そして、次は九月三日であるが、この日は、一郎が子供たちを連れて、いつもの丘に駆け上がって来ると、そこにはまだ又三郎は来ていなかった。そこでみんなは声をそろえて、「……又三郎、又三郎、どうどつと吹いて来」と、それに似たような言葉をその後も何度何度も繰り返しながら叫んでいるうちに、やがて又三郎がやって来る。そして、実は、「……あすこに白い雲が環になって光っているんだらう。僕はあのまん中をつきぬけてもつと上に行ったんだ。そして叔父さんに挨拶して来たんだ、僕の叔父さんなんか偉いぜ。今日だってもう三十里から歩いているんだ」と言う。そして、子供の一人が、「……又三郎さんは去年も今頃ここへ来たか」と聞くと、「……去年は今よりも少し早かったらう。九州からまるで一飛びに馳けて馳けてまっすぐ東京へ来たらう、そしたら丁度僕は保久大將の家を通りかかったんだ。僕はね、あの人を前にも知っているんだよ、だから面白くて家の中をのぞきこんだんだ。そして、『ドッドド、ドドウド、ドドウド、ドドウ、甘いざくろも吹き飛ばせ、酸っぱいざくろも吹き飛ばせ』という感じで。ホラね、ざくろの実が

ばたばた落ちたんだ。(中略)、それからその晩、夜どおし馳けてここまで来たんだ。そして、今年だって二百二十日になったら僕は又馳けて行くんだ」と言う。

すると、小さな子供たちは一斉に、「ほう、いいなあ、又三郎さんたちはいいなあ」と言う。それに対して、又三郎は、「……お前たちはだめだねえ、なぜ人のことをうらやましがるんだい。僕だってつらいことはいくらもあるんだい。お前たちにもいいことはたくさんあるんだい。僕は自分のことを一向考えもしないで人のことばかりうらやんだり馬鹿にしているやつらは一番いやなんだぜ。僕たちの方ではね、自分を他のものとからべるとが一番恥ずかしいことになっているんだ。僕たちはみんな一人一人なんだよ」と言う。それに対して、一郎は次のように応える。「……又三郎さん、おらはお前をうらやましてしまったでないよ、お前をほめたんだ。おらはいつでも先生から習っているんだ。本当に男らしいものは、自分の仕事を立派に仕上げることをよるこぶ。決して自分が出来ないからって人をねたんだり、出来たからって、出来ない人を見くびったりしない」と。この「言葉」は、そのまま宮沢賢治自身の「言葉」でもあるのだろう。……

四、九月四日

では、次は、九月四日になるが、この日は、又三郎はみんなが丘の栗の木の下に着くやいなや、いきなり「サイクルホールの話聞かせてやろうか」と言う。この「サイクルホール」というのは、いわば「渦を巻く風」のことであり、「……小さなサイクルホールなら僕たちたった一人でも出来る。くるくるまわって走れあいいからね。そうすれば、木の葉や何かマントにからまって、丁度うまい工合かまいたちになるんだ。ところが大きなサイクルホールはとても一人じゃ出来あしない。小さいのなら十人ぐらい。大きなやつなら大人もはいつて千人だってあるんだよ」と言う。そして、それは、「……日がかんかんどこか一とこに照る時か、また僕たちが上と下と反対にかける時ぶつつかっってしまうことがあるんだ。そんな時とまあふたいろにきまっているねえ。あんまり大きなやつは、僕はよく知らないんだ。南の方の海から起って、だんだんこつちにやってくる時、一寸僕等がはいるだけなんだ。ふうと馳けて行って十ぺんばかりまわったと思うと、もうずつと上の方へのぼって行き、そんな大きなやつへうまくはいると、九州からこつちの方まで一ぺんに来ることも出来るんだ。けれどもまあ、大抵は途中で高いとこへ行っちゃまうね。だから大きなのはあんまり面白かあないんだ。十人ぐらいでやる時は一番愉快だよ」と言う。

そして、「……竜巻はねえ、ずいぶん凄いや。海には僕は入ったことはないが、小さいのを沼でやったことがあるよ。丁度お前達の方のご維新前ね、日詰の近くに源五沼(五郎沼)という沼があつて、そのすぐ隣の草はらで、僕等は五人でサイクルホールをやつた。ぐるぐるひどくまわっていたら、まるで木も折れるくらい烈しくなつてしまい、丁度雨も降るばかりのところだった。一人の僕の友だちがね、沼を通る時、とうとう機みで水を掬っちゃつたんだ。さあ僕等はもう黒雲の中に突き入つてまわつて馳けたねえ、水が丁度漏斗の尻のようになって来るんだ。下から見たら本当に恐かつたろう。……『ああ竜だ、竜だ』と、みんなは叫んだよ。実際下から見たら、さっきの水はぎらぎら白く光つて黒雲の中に入って、竜のしっぽのように見えたかも知れない。その時友だちがまわるのをやめたもんだから、水はざあつと一ぺんに日詰の町に落ちかかつたんだ。その時は僕はも

うまわるのをやめて、少し下に降りて見ていたがね、さっきの水の中にいた『フナやナマズ』などがばらばらと往来や屋根に降ってくる、みんなは外へ出て恭々しく僕等の方を拝んだり、降って来た魚を押し戴いていたよ。僕等は竜じやないけれども、拝まれるとやっぱりうれしいからね」と言う。

また、逆サイクルホールというのもあるよ。これは高いところから、さっきの逆にまわって下りてくることなんだ。この時ならば、そんなに急なことはない。冬は僕等は大抵シベリヤに行つてそれをやつたり、そつちからこつちに走つて来たりするんだ。僕たちがこれをやつてる間はよく晴れるんだ。冬ならば咽喉を痛くするものがたくさん出来る。けれどもそれは僕等の知つたことじゃない。それから五月か六月には、南の方では、大抵支那の揚子江の野原で大きなサイクルホールがあるんだよ。その時丁度北のタスカローラ海床の上では、別に大きな逆サイクルホールがある、とある。——これらは、例えば、大小様々な「……つむじ風、地上の竜巻、海上の竜巻、台風、その他」などをイメージしていることになるのだろう。

五、九月五日

さて、次の日は九月五日であるが、この日は、いつものように子供たちが集まると、主人公の「風野又三郎」は、次のような話を始める。それは、「……僕たちの仲間はみんな上海と東京を通りたがるよ。どうしてって東京には日本の中央気象台があるし上海には支那の中華大気象台があるだろう。どっちだって偉い人がたくさん居るんだ。本当は気象台の上をかけるときは僕たちはみんな急ぎたがるんだ。どうしてって風力計がくるくるくる廻つていて僕たちのレコードはちゃんと下の機械に出て新聞にも載るんだろう。誰だつていいレコードを作りたいからそれはどうしても急ぐんだよ。でも俄に急いだりすることは大へん卑怯なことでとされているんだ」と言う。そして、上海の気象台の上を通ると、いつも下には、支那人の理学博士と助手の子供が一人いて、子供は、風の吹き方を見て、「これは颱風ですね」と言うが、支那人の博士はいつも一向に相手にしない。——例えば、子供が、「これはきつと颶風ですね。ずいぶんひどい風ですね」と言うと、博士は葉巻をくわえたまま笑つて、「家が飛ばないじゃないか」と言つて相手にしない。また、子供が、「この風はたしかに颱風ですね」と言うと、博士は、「瓦も石も舞い上らんじやないか」と言い、子供が、「だつて木の枝が動いてますよ」と言つても、博士はまるで相手にしない。このような会話を、又三郎は、上海の気象台の上を通るたびに聞いていたので、ある日、低気圧と一緒に上海の気象台の上を通つた時は、風力計の腕がまるで眼にも見えない位速くまわっているのを見、又あの支那人の博士が黄色なレーンコートを着子供の手が黒い合羽を着てやぐらの上に立つて一生懸命空を見あげているのを見た時、さあ僕はもう笛のように鳴りいなくまのように飛んで、『今日は暴風ですよ、そら、暴風ですよ。今日は。さよなら』と叫びながら通つたんだ。また、ある日、水沢の臨時緯度観測所の上を通つた時も、下では木村博士と気象の方の技手とがテニスをしていて、どう見ても技手は博士にかなわないので、気の毒に思つて、テニスの得意な木村博士のサーブを風を吹かせてとんでもない方向に飛ばして、博士が、「こんな筈はないぞ」と言うのを聞いて、これ位言わせれば沢山だと思つて観測所を離れ、そして、次の日、ここへ来たんだよと言う。

六、九月六日

さて、次は、九月六日であり、この日は、午前中は、しとしとと雨が降り、午後にはすっかり晴れ上がって、授業が終わると、一郎も耕一も学校の門の処で「あばえ」と言ったり別れてしまいました。——というのも、又三郎もはじめこそほんとうにめずらしく奇体だったのですが、だんだんなれて見ると割合ありふれたことになってしまつてまるで東京からふいに田舎の学校へと移つて来た友だちぐらいしか思われなくなつていたのです。

さて、耕一の家は、学校から川添いに十五町ばかり遡つた処にありました。そして、その「帰り道」で、次のようなことが起こるのでした。それは、櫓や樺の木が途に被さつたところがあり、耕一がその下を通ると、俄かに木がゆれてつめたい雫が一ぺんにざつと落ちて来て、肩から背中まで濡れました。耕一は、ちよつと梢を見上げて顔を少し赤らめ笑いながら歩いて行くと、次の木のトンネルを通る時も、ざつとその雫が落ちてきて、今度はすっかり体まで水が滲みるくらい濡れました。耕一はぎよとしましたが、やつぱり口笛を吹いて歩いて行くと、まもなく、また、木のかぶさつた処を通る時、今度は周囲に十二分に注意を払いながらも、今度もぎあつと雫が落ちてきたのです。「誰だ、誰だ」と叫んでも、何の返事もなく、そこで今度は傘をさして行こうと思ひ、傘を(少し)開くと、俄にどうつと風が吹いて傘はぱつと開き、終には傘は風にこわされ蕈のようになりまし。耕一は、とうとう泣き出すと、丁度それと一緒に向うではあはあ笑う声がし、驚いてそちらを見ると、それは、又三郎でした。耕一は、怒つて、「何為あ、ひとの傘ぶつかして」と言うと、又三郎はいよいよ笑いころげるのでした。耕一は、もうこらえ切れず持つていた傘をいきなり又三郎に投げつけ、それから泣きながら組み付いていきました。すると又三郎はすばやくガラスマントをひろげて飛びあがつてしまい、もうどこへ行ったか見えなのです。耕一は、しばらく悔しさにしくしく泣いていましたが、やつとあきらめてうちへ帰り、縁側から入ろうとしてふと見ると、さっきの傘が元通り直つた状態でひろげて干してあるのです。耕一は、縁側に座りながらとうとう笑い出してしまいました。

ちなみに、こちら辺の「内容」とその次の「内容」その他が、小さな子供たちに読ませるにはいまいち「問題」があるという感じで、恐らく、表舞台から裏舞台へと、それは、宮沢賢治自身も、そのような「心の動き」から、新たな『風の又三郎』へと書き換えることになる、その大きな「動機」(要因)の一つにもなっているのだろう。……

七、九月七日

さて、次の九月七日は、雨もすっかり晴れて、日曜日でしたから誰も学校に出来ませんでした。ただ耕一は、昨日、又三郎にあんなひどい悪戯をされたので、どうしても今日は遭つてうんとひどい目にあわそうと思ひ、自分一人でもこわかつたので、一郎をさそつて朝の八時頃からあの栗の木の下に行つて待つていました。すると又三郎の方でも大へんに早く丁度九時頃、丘の横の方から何か考え込んだような風をして鼠いろのマントをうしろへはねて腕組みをして二人の方へやつて来たのでした。さあ、しつかり談判しなくちゃいけないと考へて耕一はどきどきとしました。又三郎は、二人が居るのを知つていたようでした。

たが、いかにも考え込むという風で二人の前を知らないふりして通り過ぎようとする、
「又三郎、うわあい」と、耕一はいきなりどなりました。又三郎はぎよつとしたようにふり向いて、「……どうして今日はこんなに早いんだい」と訊ねると、一郎は、「日曜でさ」と言い、又三郎も、「あつ、忘れていたよ」と言う。やがて、耕一は、「うわあい、又三郎、汝などあ、世界に無くてもいいな。うわあい」と言う。すると、又三郎は、「……やあ、耕一君、昨日はずいぶん失敬したね。」「……昨日は、実際失敬したよ。僕、雨が降ってあんまり気持ちが悪かったもんだからね」、「……僕たちが世界中になくてもいいってどう言うんだい。箇条を立てて言うてごらん」と言う、耕一は、「……汝などあ悪戯ばりさな。傘ぶつ壊したり。」「それから」、「樹折ったり転覆したりさな。」「それから」、「稲も倒さな。」「あとはどうだい」、「家もぶつ壊さな。」「それから」、「砂も飛ばさな。」「それから」、「シャツポも飛ばさな。」「それから」、「電信柱も倒さな。」「それから」、「塔も倒さな。」「塔は家のうちだ。それから」、耕一は、もう大抵言ってしまったので、いくら考えてももう出てきません。苦しまぎれに、「風車もぶつ壊さな」と言う、又三郎は、今度こそはまるで飛びあがって笑ってしまいました。風車なら僕を悪く思っちゃいいんだよ。勿論、時々壊すこともあるけど、廻してやる時の方がずうっと多いんだ。

そして、又三郎は、「……僕たちのやるいたずらで一番ひどいことは日本ならば稲を倒すことだよ。二百十日から二百二十日ころまで、昔はその頃ほんとうに僕たちはこわがられたよ。なぜってその頃は丁度稲に花のかかるときだろう。その時僕たちにかげられたら花がみんな散ってしまつてまるで実にならないだろう。けれどもいまはもう農業が進んで、二百十日のころになど花の咲いている稲なんか一本もないだろう。大抵もう柔らかな実になっているか、早い稲はもうよほど硬くさえているよ。もう一つは、木を倒すことだよ。これだって、倒れないようにして置けあいんだ。僕だつていたずらはするけれど、いいことはもつと沢山するんだよ、色々な花の花粉を運ぶだろう。それから、僕らが通ると草木はみんな丈夫になるよ。悪い空気も持つて行っていい空気も運んで来る。もし僕がいなかったら病氣も湿気もいくらふえるか知れないんだ。……」と言う。

八、九月八日

さて、九月八日になると、その日は、大へんいい天気でした。みんながいつもの栗の木の下に集まると、又三郎は、北極は寒いかいという話をきっかけに、やがて、「大循環」の話が始める。それは、「……赤道から北極まで大循環さえやるんだ。赤道には僕たちが見るとちゃんと白い指導標が立っているよ。お前たちが見たんじやわかりやしない。大循環志願者出発線、これより北極に至る八千九百ベエスタ、南極に至る八千七百ベエスタ」と書いてあるんだ。僕は「大循環は二編やったよ。尤も一編は途中からやめて下りたけれど、僕たちは五編大循環をやつて来ると、もうそれ幅が利くんだからね、だからみんなでかけるんだよ。けれども仲間々うまくいかないからね」とあり、その後は、赤道から北極までどのように行ったかの話であり、それがいかに大変で必死の努力がどれほど必要かを事細かに説明をし、そして、「……大循環到着者はこの付近に於て数日間休養すべし、帰路は各人の任意なるも障碍は来路に倍するを以て充分の覚悟を要す。……」という白い杭が、あちこちの氷山に立っている。それから、これより赤道に至る八千六百ベエスタ

というような標もあちこちにある。だから僕たちはこの辺でまあ五六日はやすむねえ、そしてまったくあの辺は面白いんだよ。白熊も居るしね、あいつはふざけたやつだねえ、あつぷあつぷ溺れるまねをしたりなんかもするねえ、そんなことをしてふざけながらちゃんと魚をつかまえるんだからえらい。それからその次に面白いのは北極光だよ。ぱちぱち鳴るんだよ、ほんとうに鳴るんだよ。紫だの緑だのずいぶん奇麗な見世物だよ。そのうちとうとう又帰るようになるんだ。それは、あした又話すからね。じゃさよなら。……

九、九月九日

さて、九月九日の本文は、次のようなものである。「……北極は面白いけれどもそんなに永くとまっている処じゃない。うっかり馳せまわってふらふらしているとこなどを、ヘルマン大佐などに見られようもんならさっそく、おい、その赤毛、入れ、なんて来るからねえ、いくら面白いたって少し疲れさえなおったら出発をはじめるんだよ。帰りはもう自由だからみんなて手をつながなくてもいいんだ、気の合った友達と二人三人ずつ向うの隙き次第出掛けるだろう。僕の通って来たのはベーリング海峡から太平洋を渡って北海道へかかったんだ。どうしてどうして途中のひどいこと前に高いところをぐんぐんかけたどこじやない、南の方から来てぶつつかるやつはあるし、ぶつつかったときは霧がきたり雨をちらしたり負ければあと戻りをしなけいけないし、丁度力が同じだとしばらくとまったりこの前のサイクルホールになったりするし、勝ったつてよっぽど手間取るんだからそらあ實際気がいらするんだよ。喧嘩だつてずいぶんするよ。けれども決して卑怯はしない。そら僕らが三人ぐらい北の方から少し西へ寄って南の方へ進んで行くだろう。向こうから丁度反対にやつて来るねえ、こつちが三人で向うが十人のこともある。向うが一人のこともある、けれども勝ちまけは人数じゃない力なんだよ、人数へ早さをかけたものなんだよ」とある。そして、北極から丁度一ヶ月目には、僕は津軽海峡を通ったよ。あけがたでね、函館の砲台のある山には低く雲がかかっている。僕はそれを少し押しながらかんだ。海すずめが何重もの環になって白い水にすれすれにめぐっている。かもめも居る、船も通る、えとろふ丸なんていう荷物を一杯に積んだ大きな船もあれば白く塗られた連絡船もある。そうそう、そのとき僕は北海道の大学の伊藤さんにも会った。あの人も氣象をやっているから僕は知っている。それから僕は少し南へまっすぐに朝鮮へかかったよ。(以下省略)。——これは、一体、何なのかと問えば、それは、まさに「北」(北極)から「南」(赤道)への「氣象の流れ」と、もう一方の「南」(赤道)から「北」(北極)への「氣象の流れ」であり、そして、また、西から東への「氣象の流れ」、それらがぶつかり合う様子を、そのように描いているということである。

例えば、テレビの場合、ふだんの「天気予報」では、いわゆる「氣象予報士」の人が一人現われて、主に「日本列島」などを中心とした「天気予報」を行なっているかと思うが、それをもっと地球規模化した「世界地図(北半球)」「それは「赤道から北極」までの地図(南)などを前にして、大規模な「天気予報」(氣象の流れ)などを行なえば、例えば、フィリピン沖で発生した「台風」などを説明する場合、その「北半球の地図」では、具体的には、東南アジア諸国、中国、ロシア(シベリア)、朝鮮半島(北朝鮮と韓国)、また、日本海と日本列島、太平洋とオホーツク海、そして、ベーリング海、その他などを前にし

「主人公」（例えば「風野又三郎」）が登場する時の「効果音」として「使用することによって、その「主人公」（例えば「風野又三郎」）の登場が、より魅力的に観えて来るという、そういう、まさに「演出的効果」もあるということである。

次に、その「言葉」の意味であるが、まず最初の「……どつどつ、どつどつ、どつどつ、どつどつ」というのは、言うまでもなく、「風の音」であり、しかも、「ドの音」で始まるということは、決して「軽い音」ではなく、むしろ重低音のような不気味な「音」を響かせている。そして、「……ああまいざくろも吹きとばせ、すっぱいざくろもふきとばせ」ということは、「甘いざくろは残し、すっぱいざくろだけ吹き飛ばせ」ということではなく、まさに「すべてのざくろを吹き飛ばせ」ということである。それは、結局、「風」そのものは、われわれ人間のような、いわゆる「善悪」や「利害損得」の判断などは、全く出来ない（もちろん「マンガやアニメ」のように擬人化すれば出来る）ということである。

——すべては、まさに「自然の摂理」に基づいて生じて来るものであり、それゆえ、すべては「結果」に過ぎず、「風が吹いた」ことが、結果として、「善いこと」になる場合もあれば、逆に、「悪いこと」になる場合もある。それらは、すべて「結果」に過ぎず、「風」そのもの、あるいは「自然」そのものは、すべて「自然の摂理」に基づいて生じて来るだけである。ここに、「自然」そのものの本当の「恐ろしさ」があるのである。なぜなら、「自然」そのものは、われわれ人間のような、いわゆる「善悪」や「利害損得」などの判断は、全く持ち合わせてはいない。それゆえ、人間のことなど何一つ考えてはいないのである。それゆえ、たとえ様々な「自然災害」（例えば、地震、津波、台風、ハリケーン、集中豪雨、洪水、土砂崩れ、落雷、豪雪、雪崩、大噴火、隕石衝突、その他）でどれほどの「犠牲者」が出ようと、そんなことは、全くお構いなしなのである。それが、まさに「自然」そのものであり、「自然」そのものは、本来、どこまでも「不気味で恐ろしいもの」であって、例えば、海であれ、山であれ、川であれ、空であれ、その他、何であれ、ひとたび本気で荒れ狂ったら、人間などひとたまりもないのである。だからこそ、われわれ人類は、遙か遠い大昔から、様々な「自然」を「神」として崇め、祭り、生け贄や供え物などをし、歌ったり、踊ったりして、その「ご機嫌」を伺いながら、まさに「自然の驚異」を「鎮めてきた」ということである。

*

*

風の又三郎

「風の又三郎」について

例えば、宮沢賢治の数多くの「作品」の中でも、いわゆる『風の又三郎』という作品は、非常に人気の高い「作品」の一つであり、それでは、一体、どこにどのような「魅力」があるのだろうか？ そのことについて少し考えてみたいと思うが、まず、本文の「冒頭」は、次のような「内容」から始まるものである。

* どつどど どどうど どどうど どどう

青いくるみも吹きとばせ

すっぱいかりんも吹きとばせ

どつどど どどうど どどうど どどう

谷川の岸に小さな学校がありました。

教室はたった一つでしたが生徒は一年から六年までみんなありました。運動場もテニスコートのくらいでしたが、すぐうしろは栗の木のあるきれいな草の山でしたし、運動場のすみにはごぼごぼつめたい水を噴く岩穴もあつたのです。

さわやかな九月一日の朝でした。青ぞらで風がどうと鳴り、日光は運動場いっぱいでした。黒い雪袴ゆきばかまをはいた二人の一年生の子がどてをまわって運動場にはいつて来て、まだほかに誰も来ていないのを見て、「ほら、おら一等だぞ。一等だぞ」とかわるがわる叫びながら大よろこびで門をはいつて来たのでしたが、ちよつと教室の中を見ますと、二人ともまるでびっくりして棒立ちになり、それから顔を見合せてぶるぶるふるえましたが、ひとりはどうとう泣き出してしまいました。というわけは、そのしんとした朝の教室のなかにどこから来たのか、まるで顔もしらないおかしな赤い髪の子供がひとり、いちばん前の机にちゃんとすわっていたのです。そしてその机といたらまったくこの泣いた子の自分の机だったので。（中略）、そして、（教室のなかで座っているその子は）、形からが実におかしいのでした。変てこなねずみいろのだぶだぶの上着を着て、白い半ずぼんをはいて、それに赤い革の半靴はんぐつをはいていたのです。それに顔といたらまるで熟したりんごのように、ことに目はまん丸でまっくらなものでした。（中略）、いっこうに言葉が通じないようなので一郎も全く困ってしまいました、とある。

* * *

さて、ここまでの「引用文」は、前述の『風野又三郎』の「本文」と基本的には「ほとんど同じ内容」であり、ただ、はつきりと違う部分は、「……変てこな鼠ねずみいろのマントを着て、とにかくきれいなすきとおった沓くつをはいていた」という内容から、今度は、「……変てこなねずみいろのだぶだぶの上着を着て、白い半ずぼんをはいて、それに赤い革の半靴はんぐつをはいていた」という内容へと書き換えている。一方、書き換えなかった部分は、「……赤い髪をして、顔はまるで熟したりんごのよう、ことに目はまん丸でまっくらでした」という部分である。それでは、なぜ、「……マントからだぶだぶの上着に替え、また、透き通った沓から赤い革の靴に替えた」のかと問えば、それは、まさに「風の子」から「人間の子」へと替えるためであり、また、なぜ、「……赤い髪をして、顔はまるで熟したりんごのよう、ことに目はまん丸でまっくらでした」という部分だけは書き換えなかったかと

問えば、それは、まさに「風の子」の部分も残すためであったということである。

* *
つまり、「作者」（「宮沢賢治」）は、いわゆる『風野又三郎』という作品を書く時には、まさに百%風の子「風野又三郎」として描いたのに対して、今度の『風の又三郎』という作品を書く時とする時には、「作者自身」（つまり「宮沢賢治」）の「頭の中」（或いは「心の中」）では、ある種の「迷い」があつて、それは、つまり、まさに百%人間の子「高田三郎」にしたほうがよいのか？ それとも、「風の子の部分」を残すにしても、一体、どのくらい「風の子の部分」を残したほうがよいのかと迷つた時に、「作者」（つまり「宮沢賢治」）は、ある程度「風の子の部分」も残した人間の子「高田三郎」にしたほうがよいということになつたのである。——つまり、人間の子「太田三郎」であるとともに、風の子「風野又三郎」の部分もある程度は残したということである。その「一つの証拠」となるものが、まさに「……赤い髪をして、顔はまるで熟したりんごのよう、ことに目はまん丸でまっくらでした」という特徴を残したということと、もう一つは、五年生の「嘉助」に、わざわざ強い風が吹いた時に、突然、「……ああわかつた、あいつは風の又三郎だぞ」と言わせる場面があるが、そこにこそ、作者の「意図」（つまり「想い」）がはっきりとあるのであり、それは、まさに風の子「風野又三郎」という特徴をも主人公に持たせようとした「意図」（つまり「想い」）が、はっきりと見えているのである。なぜなら、まさに百%人間の子「高田三郎」にするつもりであれば、そのようなことを言わせる必要などどこにもないからである。それゆえ、まさにある程度は「風の子の部分」も残したほうがよい（或いは「残しなかった」という結論になるということ）である。

つまり、「作者」（「宮沢賢治」）の「頭の中」（或いは「心の中」）では、基本は、まさに転校生・人間の子「高田三郎」という「設定」に書き換えながらも、もう一方では、いわゆる風の子「風野又三郎」という特徴をも、ある程度は残した（或いは「残しなかった」ということである。それでは、なぜ、そのようなことをしたのかと問えば、それは、次のようなことである。——つまり、自然界において、風は、多かれ少なかれ、必ず、吹いているものである。そして、強く吹く時もあるれば、また、弱く吹く時もあり、その結果として、様々な悪戯いたずらをすることもある。だとすれば、風の子「風野又三郎」は、姿は見せなくとも、絶えず存在していることになる。つまり、風の吹くところには、必ず、風の子「風野又三郎」は、存在しているのであり、それゆえ、風の子「風野又三郎」を完全に排除することはでき得ないとともに、いわゆる「風」（特に「強い風」）などが吹けば、その地域の小さな子供たちは、自然と、「……あつ、今のは、風の子『風野又三郎』の悪戯いたずらだ！」と思うような「風土的な環境」もあつたのだろう。それゆえ、今度の『風の又三郎』という「作品」の主人公に最もふさわしいのは、一方では、転校生、つまり、人間の子「高田三郎」であるとともに、一方では、突然、どこからともなく「姿」を現わし、また、どこへともなく消えて行く、そういう、小さな子供たちから見れば、まさに風の子「風野又三郎」的な特徴をも兼ね備えたような、そういう、まさに新しい主人公の「風の又三郎」にしたかつたということである。ところが、実際に書き進めていくうちに、多くの場合、人間の子「高田三郎」として描かれていることが多くなり、もう一方の風の子「風野又三郎」としては、嘉助かかだけが、特に「そう思い込んでいる状態」であり、ほかの子供たちは、嘉助が、そう言うから、そうなんだろう、と思つていような状態であるのである。

* * *

それでは、なぜ、「作者」（「宮沢賢治」）は、主人公を「風の子」から「人間の子」へと書き換えたのだろうか？ それには次のような非常にはつきりとした理由があるからである。――つまり、われわれ人間の「人間形成期」（つまり「人間として形成されていく時期」）としては、第一期の「人間形成期」（それは「乳幼児期」（〇歳～五歳まで）があり、また、第二期の「人間形成期」（それは「小学校時代」（学童期）（六歳～十一歳まで））があり、そして、第三期の「人間形成期」（それは「中・高時代」（思春期）（十二歳～十七歳まで））があり、最後に、第四期の「人間形成期」（それは「大学・社会人時代」（十八歳～三十歳前後）があるということである。そして、第一期の「乳幼児期」（〇歳～五歳まで）というのは、まさに「家族関係」（特に「親子関係」）などが極めて親密な時期であり、また、第二期の「小学校時代（学童期）」（六歳～十一歳まで）は、子供同士の実に様々な「子供の遊び」などが最も盛んな時期であり、そして、第三期の「中・高時代（思春期）」（十二歳～十七歳まで）は、まさに「第二次性徴」とともに、自我がはつきりと目覚めて、異性への関心なども非常に高まる時期にあたるということである。

そして、「作者」（「宮沢賢治」）という人は、第二期の「人間形成期」（それは「小学校時代」（学童期））というものを、その現実の「生のままの子供たち」というものをできるだけ生き生きと描いておきたくなったということである。つまり、「作者」（つまり「宮沢賢治」）という人は、自分が子供だった頃を「思い出」しながら、その子供の頃になりきった「目線」で、その現実の「生のままの子供たち」をできるだけ生き生きと描いておきたくなったのである。それは、一体、なぜかと問えば、それは、自分の子供の頃のまさに「原風景」（或いは「原体験」）そのものであるとともに、自分の「人間形成」の「原点」そのものでもあるからである。そこで、「作者」（つまり「宮沢賢治」）は、自分の子供の頃の「体験や経験」などを踏まえた「作品」であつたであろう、有名な『種山ヶ原』や『さいかち淵』その他などを、まさに「ここに持ってきた」ということである。

つまり、『風の又三郎』という作品をよくよく丁寧に読んでみると、その「内容」は、大きく「二つ」に大別されているが、その一つは、まさに学校での「授業風景」その他であり、そして、もう一つは、まさに放課後の「子供同士の遊び」その他であり、あとは「自然」が描かれているだけである。これは、一体、どういふことかと問えば、それは、結局、この「二つのもの」（或いは「自然」をも含めた「三つのもの」）をできるだけ生き生きと描いておきたかったということである。それゆえ、この「二つのもの」（或いは「三つのもの」）を中心にして考えを進めていきたいと思う。

一、九月一日

先ず、九月一日、晴れた日、子供たちは、久しぶりに学校に登校して来る。最初に登校して来た「二人」（一年生）は、教室の中に見知らぬ赤毛の子供が一人いるのを見て、二人はぶるぶるふるえ、一人は泣き出してしまふ。そこに、次から次へと子供たちが集まつて来ては、最後に、六年生の「一郎」も来て、外から窓の中にいる子供に、「……誰だ、時間にならないに教室へはいってるのは」、「……早く出はつて来、出はつて来」と言つても、何の返答もなく、みんなががやがや騒いでいると、「……そのとき風がどつと吹い

て来て教室のガラス戸はみんながたがた鳴り、学校のうしろの山の萱や栗の木はみんな変に青じろくなつてゆれ、教室のなかの子どもはなんだかにやつと笑つてすこしうごいたようでした。すると嘉助がすぐ叫んだ。「……ああわかった。あいつは風の又三郎だぞ」、そうだとみんなも思った、とある。この嘉助の「言葉」がきつかけとなり、転校生・人間の子「高田三郎」は、若しかしたら伝説の「風の又三郎」ではないかと思われるようになる。特に嘉助は、「……そう思い込んでいる状態」である。——これはもちろん、「作者」（つまり「宮沢賢治」）が意図的にそうしているのであり、「作者」（つまり「宮沢賢治」）の「頭の中」（或いは「心の中」）では、基本は、まさに転校生・人間の子「高田三郎」という設定にしながらも、もう一方では、いわゆる風の子「風野又三郎」という特徴をもそれなりに残した（或いは「残しておきたかった」ということである）。

やがて、玄関から呼び子を右手に持った先生が出て来て、そのすぐ後ろから、さっきの赤毛の子、白いシャツポをかぶつて、先生について出て来る。そして、先生は呼び子をビュルルと吹くと、「……六年生は一人、五年生は七人、四年生は六人、三年生は十二人、二年生は八人、そして、一年生が四人、前へならえて組ごとに一列に縦に並びました」とあるが、これは、今日の「朝礼」の時にも、それぞれ「組ごとに一列に縦にならぶ」と、まったく同じ整列の仕方であり、例の赤毛の子は、五年生の嘉助のすぐうしろに入ることになる。その後、一年生から順に、下駄箱のある入口へと歩いていき、下駄箱で上履きに履き替えて、自分の教室へと入っていく。もちろん、教室は一つであるとともに、教室の席順も、外での並びのように、組ごとに一列に机にすわりました、とある。

さて、先生は、「……みなさん、長い夏のお休みはおもしろかったですね。みなさんは朝から水泳ぎもできたし、林の中で鷹にも負けないくらい高く叫んだり、またにいさんの草刈りについて上の野原へ行ったりしたでしょう。けれどももうきのうで休みは終わりました。これからは第二学期で秋です。むかしから秋はいちばんからだもころもひきしまつて、勉強のできる時だといつてあるのです。ですから、みなさんもきょうからまたいっしょにしっかりと勉強しましょう。それからこのお休みの間にみなさんのお友だちが一人ふえました。それはそこにいる高田さんです。そのかたのおとうさんはこんど会社のご用で上の野原の入り口へおいでになつていられるのです。高田さんはいままで北海道の学校におられたのですが、きょうからみなさんのお友だちになるのですから、みなさんは学校で勉強のときも、また栗拾いや魚とりに行くときも、高田さんをさそうようにしなければなりません。わかりましたか。分かった人は手を上げてごらん下さい」と言い、また、「……きょうはみなさんは通信簿と宿題をもつてくるのでしたね。持って来た人は机の上へ出してください。私がいま集めに行きますから」とある。そして、先生がみんなのを集めてしまうと、「……きょう持って来なかった人は、あしたきつと忘れないで持って来てください。ではきょうはここまでです。それから四年生と六年生の人は、先生といっしょに教室のお掃除をしましょう。ではここまで」とあり、一郎の「気をつけ」、「礼」、（今日では一般に「起立・礼・着席」）になるかと思う。これらは、実に懐かしい小学校の「ホームルーム風景」であり、誰もがそれぞれ小学校の頃の懐かしい「想い出」が実にいろいろと呼び覚まされて来るのではないだろうか。それこそは、まさに作者の「願い」そのものでもあるのである。

一方、三郎の父親は、同じ教室にいて、ホームルームの後、先生に、「……何ぶんどう

かよろしくお願いいたします」と丁寧^{ていねい}に挨拶をして、三郎を連れて一緒に家へと帰って行くのである。(ちなみに、先生は、標準語で話をしている。だとすれば、地元出身の先生ではなく、恐らく、東京出身の先生であり、それゆえ、服装も「洋服」を身につけていたということである。)

二、九月二日

さて、次の日は、一郎も嘉助^{かすけ}も、早めに学校に行き、あの赤毛の変な子は、今日もやって来るだろうかと、鉄棒の上と下で待っていると、三郎は、どてをぐるっとまわって、正門から「お早う」と入って来る。二人は勢いに押されて、返事に口ごもってしまう。三郎は、運動場を見まわして、誰か遊び相手でもさがすようでしたが、やがて、「……この運動場は、何間^{なんけん}あるかというように、正門^{せいもん}から玄關^{げんかん}まで大またに歩数を数えながら歩き始めました」とある。(これは恐らく、賢治自身、子供の頃から「山歩き」などをしていたということなので、或いは、そういうことが出来たのかも知れない)。やがて、先生が出てきて、校庭で整列し、教室へと入って行く。そして、いわゆる一時間目の「授業」が始まることになるが、それは、「……一年生と二年生の人はお習字のお手本^{すずり}と硯^{すずり}と紙を出して、三年生と四年生の人は算術帳と雑記帳と鉛筆^{えんぴつ}を出して、五年生と六年生の人は国語の本を出してください」とある。そして、この中で興味深いのは、算数の時間であり、三年生は「引き算」、四年生は「かけ算」を勉強しているという場面である。

* * *

例えば、古代ギリシアのピタゴラス学派では、「一」という数字は、「一」であるとともに、「すべて」を意味する数字でもあったのである。それでは、「二」という数字は、一体、どういう数字かと問えば、それは、例えば、一つの「丸いケーキ」があるとすると、それを真ん中から縦に半分^{まんなか}にすれば、ケーキは「二分」されて、「二つ」になる。これが、すなわち、「二」という数になるのである。同じように、「三」という数字は、「丸いケーキ」を「三等分」、そして、「四」は、「丸いケーキ」を「四等分」して、まさに「四」になるのである。これがピタゴラス学派の一つの「数」の「考え方」になるのである。

例えば、「二分の一」というのは、「丸いケーキ」を「半分にした状態」であり、また、「三分の一」というのは、「丸いケーキ」を「三等分した状態」であり、そして、「四分の一」というのは、「丸いケーキ」を「四等分した状態」のことであり、これが、すなわち、「分数の映像化」である。——例えば、「四分の四」は、なぜ「一」になるのか？ それは、「四分の四」というのは、「丸いケーキを四等分し、その四等分されたケーキが四つある」という意味であり、だから、「一」になるのである。また、「四分の三」というのは、「丸いケーキを四等分し、その四等分されたケーキが三つある」という意味なのである。それでは、「四分の五」が、なぜ「一と四分の一」になるのか？ それは、「四等分されたケーキが四つあれば、一になり、残りは、四分の一になる」からである。

次に、「分数のたし算」であるが、例えば、二分の一と四分の一を足したら、いくつになるのか？ この場合、二分の一の「大きさ」と四分の一の「大きさ」が全く違う。それゆえ、「分母」(大きさ)を揃^{そろ}えなければならぬ。そのためには、二分の一を四分の二にすれば、「大きさ」が同じになる。同じ「大きさ」になれば、足し算ができる。つまり、

四分の二十四分の一＝四分の三つになる。それでは、二分の一と三分の一を足したら、いくつになるのか？ この場合、「分母」（大きさ）を揃えなければならぬ。同じ「大きさ」が同じになる。「分母」（大きさ）が同じになれば、足し算ができる。すなわち、六分の三十六分の二＝六分の五になる。ちなみに、「分母」（大きさ）を同じにするためには、いわゆる「分母」×「分母」で、同じ大きさの「分母」になるのである。

つまり、「分母」というのは、「丸いケーキ」を「幾つに分割したのか」という意味であり、そして、「分子」というのは、その「分割されたものが幾つあるか」という意味なのである。これが、まさに分数という数式の「意味」なのである。

それでは、「かけ算」というのは、一体、どういうものになるのか？ 例えば、 $3 \times 2 = 6$ になる。この「数式」は、一体、何を意味しているのだろうか？ それは、次のようなことである。つまり、「 $\dots:3$ の一まとまりが2つある」という意味なのである。それゆえ、 $3 + 3 = 6$ になるのである。例えば、 $9 \times 4 = 36$ になる。この場合、「 $\dots:9$ の一まとまりが4つある」という意味であり、それゆえ、 $9 + 9 + 9 + 9 = 36$ になる。これが、まさに「かけ算」の「数式の意味」なのである。——それでは、「割り算」というのは、一体、どういうものなのか？ 例えば、 $8 \div 2 = 4$ になる。これは、一体、何を意味しているのだろうか？ それは、次のようなことである。つまり、「 $\dots:8$ という総数の中に2という一まとまりがいくつあるか」という意味なのである。それゆえ、8という総数の中に2という一かたまりは4つあるので、それゆえ、 $8 \div 2 = 4$ になるのである。例えば、ミカンが「600箇」取れました。それを「30箇」入りの箱に詰めます、それでは、「30箇」入りの箱が幾つあれば、すべてのミカン「箱詰め」できるでしょうか？ この場合、総数が「600箇」、それを「30箇」ずつ箱に詰めていけば、やがては「20箱」ですべて箱詰めができることになる。つまり、「割り算」というのは、「 $\dots:600$ という総数の中に30という一まとまりがいくつあるか」という意味であり、それは、「20コある」という意味になるのである。それが、すなわち、 $600 \div 30 = 20$ という数式の「意味」なのである。

それでは、足し算は、一体、どういう「意味合い」になるのだろうか？ 例えば、 $3 + 2 = 5$ という数式は、一体、何を意味するのかと問えば、それは、「 \dots （もともと）3あったところに、新たに2加わった」という「意味合い」になるのである。しかも、ここで最も大事なことは、足し算の数式が成り立つためには、足すものは、まさに「同類のもの」でなければならず、例えば、人間の数にリンゴの数、そして、ミカンの数にミカンの数を加える時だけ成り立つ数式であり、例えば、人間3人にりんご2つを加えても、決して5にはならないのである。これは、引き算の場合も全く同じことであり、引き算の「数式」は、「 \dots （もともと）3あったところから、2引いた」という「意味合い」になるとともに、例えば、人間の数から人間の数、リンゴの数からリンゴの数、そして、ミカンの数からミカンの数を引く時だけ成り立つ数式であり、例えば、人間3人からミカン2つを引いても、決して1にはならないのである。以上、足し算、引き算、分数、かけ算、そして、割り算の、それぞれの「数式」の「意味合い」がはっきりと理解できたので、この世に存在する、足し算、引き算、分数、かけ算、そして、割り算の、ありとあらゆる問題は、すべて一つ残らず解くことができ得るのである。

例えば、 $2 + 3 \times 4 \div 3 - 2 \times 5$ 分の $2 \div 3$ 分の $2 \parallel$? という場合、まず、かけ算と割り算を先に計算し、その後、足し算と引き算を計算するようにすること。そして、この問題の「数式」の意味は、(もともと) 2 あったところに、新たに 3 の「一まとまりが4つ加わり、その総数の中に 3 の「一かたまりがいくつあるかと問えば、 4 となり、前半の数式は、 $2 + 4 \parallel 6$ になる。次は、 2 の「一まとまりが五分の二ある」という意味であり、分数の「かけ算」の仕方は、分母 \times 分母、分子 \times 分子であり、 2×5 分の $2 \parallel 1$ 分の 2×5 分の $2 \parallel 5$ 分の 4 になるのである。そして、その 5 分の 4 の総数の中に、 3 分の 2 はいくつあるかという意味になり、分数の「割り算」の仕方は、 5 分の 4×2 分の $3 \parallel 10$ 分の $12 \parallel 5$ 分の 3 となる。つまり、割る方の分数(分母 \cdot 分子)を逆にして \times れば、それで「答え」が出る。そして、最後は、 $6 - 5$ 分の 3 は、分母を揃えて 5 分の $30 - 5$ 分の $3 \parallel 5$ 分の $27 \parallel 5$ と 5 分の 2 になるのである。あとは、数字がどのような桁の数字になるうとも、全く関係なく、この世に存在する、足し算、引き算、分数、かけ算、そして、割り算の、ありとあらゆる問題は、すべて一つ残らず解くことができることになるのである。

*

*

では、今度は、五年生と六年生の「国語の時間」についてであるが、それは、まず、教科書を「黙読」させる。そして、読めない「字」や意味の分からない「字」などは、雑記帳にどんどん書き写させる。あとで、先生が、みんなの分からない「字」の「読みと意味」などを黒板に書き記す。そして、今度は、順番に「十行づつ」の「音読」をさせて、途中、先生も読み、そして、最後の人まで読み進むと「音読」はそこで終わりになる。——この国語の時間の「音読」というのは、ほとんどの人たちが一度は経験したことがあるのではないかと思うが、自分の順番が近づいて来るにつれて、心臓もどきどきして来ることもに、実際に立って読んだ時に、文章を読み間違えて、みんなから笑われたりした経験を持つ人も、意外に数多くいるのではないかと思う。

それでは、「本を読む」とは、一体、本の「何を読む」というのだろうか？ それをごく簡単に説明すると、それは、次のようなことである。——まず、一つは、「文章」そのものの「美しさ」を感じる。一つは、表面的な「意味や内容」などを読むだけではなく、もつと奥深くにある「文章の真意」(或いは「作者の真意」というものを厳密に読み解くこと。そして、最終的には、作者の「魂の鼓動」(それは「魂の声」)をできるだけ生のまま聴くということである。——例えば、ゲーテならゲーテ、シェイクスピアならシェイクスピア、ドストエフスキーならドストエフスキー、夏目漱石なら夏目漱石、太宰治なら太宰治、芥川龍之介なら芥川龍之介、宮沢賢治なら宮沢賢治の「魂の声」をできるだけ生のまま聴くということである。つまり、多くの人たちが表面的な「意味や内容」などを読むだけで終わってしまいがちであるが、しかし、「本を読む」というのは、表面的な「意味や内容」などを読むだけではなく、「本を読む」というのは、最終的には、まさに「作者の心」を深く読み説くことであり、その「文章の真意」(或いは「作者の真意」というものをできるだけ厳密に読み説くことである。そのためには、文章の「一字一句」を、文字通り、その「一字一句」をどこまでも丁寧かつ厳密に読み進むことが、何よりも大事なことになるのである。

*

*

さて、次の「二時間目」は、「音楽の時間」であり、一年生から六年生までみんな「唱

歌」(歌をうたうこと)になるが、それは、いままでに習ったのを先生のマンドリン(ふつうオルガン)に合わせて五つも歌いました。三郎もみんな知っていて、(だとすれば、小学校唱歌や童謡などか)、みんなどんどん歌いました。そして、この時間はたいへん早く過ぎました。(それは、楽しいからである)。そして、「三時間目」になると、今度は、二年生と四年生が「国語」で、五年生と六年生が「数学」でした。先生はまた黒板に問題(恐らく「割り算」)を書いて五年生と六年生に計算させました。しばらくたって一郎が答えを書いてしまうと、三郎のほうをちよつと見ました。すると三郎は、どこから出したか小さな消し炭で雑記帳の上へがりがりと大きく運算していたのです。(ちなみに、「消し炭」とは、薪や炭を途中で消してできた柔らかい炭のことであり)、三郎は、自分が持つて来た「鉛筆」は、佐太郎とその妹の「かよ」との鉛筆の取り合いの時に、佐太郎にくれてしまったので、持っていた「消し炭」をいわば「鉛筆」代わりに使っているという場面であるが、これは恐らく、子供の頃、宮沢賢治は、珍しい「鉱物」などを採って「山歩き」などをしていたので、そのような時に、例えば、自分の歩幅で「距離」などを測ったり、或いは、見つけた「鉱物」などに採取日や場所などを書くために、宮沢賢治自身、小さな「消し炭」は、いつも持ち歩いていたのかも知れない。……

三、九月四日

さて、次は、九月四日(日曜日)、空はよく晴れて、一郎は、途中で嘉助と佐太郎それに悦治などを誘って、一緒に三郎の家の方へと行きました。上の野原への途をだんだんのぼって行きました。約束のわき水の近くに來ると、「おうい、みんな来たかい」と三郎の高く叫ぶ声がし、そして、三人はやつと三郎の前まで來ると、三郎は、「ずいぶん」待たぞ。それに「きょうは雨が降るかもしれない」と言う。そして、上の野原の入り口は、きれいに茹られた草の中に一本の大きな栗の木が立って、その幹は根もとの所がまっ黒に焦げて大きな洞のようになり、その枝には古い縄や、切れたわらじなどがつるしてあった。一郎は、「……もう少し行くけどみんなして草苴つてるぞ。それから馬のいるところもあるぞ」と言いながら、草の中の一本道をぐんぐん歩いて行くと、やがて、草刈りをしている一郎の兄に出逢う。兄は、よく来たなど言いながら、土手から出ては危険だと告げて、午には戻るからと言って離れていく。子供たちは、馬が七頭いるところに行き、嘉助は、柵(丸太の棒の端)を一つ外し、みんなはそこから中に入っていく。寄って來る馬にみんなは手(塩)をなめさせるが、三郎は、最初、手をポケットに入れたままでいると、悦治から「おっかながるぢやい」と言われるので、手を馬に舐めさせるが、すぐにポケットに入れてしまい、又、悦治から「馬おっかながるぢやい」と笑われる。そこで、三郎は、向こうの大きな木までみんな「競馬」しようと言出し、それぞれ自分の馬を決めて、その馬の尻を叩いて走らせていくうちに、外れていた柵から「二頭の馬」が逃げ出してしまふ。だが、丸太を越えて外へ出ると、二頭の馬はもう走るでもなく、どての外に立って草を食べていたので、一郎は、その一頭にそうと近づいていつて捕まえることができたが、もう一頭の馬は、三郎と嘉助がそうと近づいて捕まえようとすると、驚いて、丈ぐらいある草を分けて本気で逃げ出してしまい、三郎と嘉助は、あわててその馬を捕まえようと必死に追いかけていくが、嘉助は、その三郎も馬の姿も見失ってしまい、広い草原の中を

あちこち一人で探し回っているうちに、天候も急に悪化し、深い霧の中、家のように見えるものがあり、それに近づいて行くと、大きな岩に行き当たると、途に深く迷ってしまふ。その時、「……間違つて原の向こう側へおれば、又三郎もおれも、もう死ぬばかりだ」と、嘉助は半分思うように、半分つぶやくようにした。それは、初めて「身の危険」を感じて、まさに「自分自身にそう言い聞かせた」ということである。そして、「……非常に強い風が吹いて来て、空が旗のようにばたばた光って翻り、火花がパチパチパチッと燃えました」とある。そのような感じに見えるほど、まさに精神的にも肉体的にも「疲労困憊」をしていて、「……嘉助はどうとう草の中に倒れて眠ってしまった」とある。そして、その「夢の中」で、三郎が「風の又三郎」としてガラスのマントで空を飛ぶ夢を見る。ふと眼を覚ますと、近くに馬がいて、また、「おおい、嘉助、いるが、嘉助」と、一郎やそのにいさんの声などが聞こえて来る。そして、「おおい。いる、いる、一郎、おおい」ということで、一郎のにいさんと一郎が、とつぜん目の前に立ち、嘉助はにわか泣き出す。一郎のにいさんは、「捜したぞ。あぶながつたぞ。すつかりぬれたな。……」と言うのであった。そして、彼らの帰りを栗の木の所でずつと待っていたお爺さんも、「全体どこまで行つた」と聞くと、一郎のにいさんは、「笹長根のおり口だ」と答える。それを聞いて、お爺さんは、「……あぶないがった。あぶないがった。向こうさ降りたら馬も人もそれつ切りだつたぞ」と言うのであった。その後、みんなは野原を下りるが、嘉助は、その帰り道で、「……あいづっぱり風の神だぞ。風の神の子つ子だぞ」と言うが、一郎は、「そでないよ」と否定するのであった。……

四、種山ヶ原

さて、この「高の原の場面」は、すでに書かれてあった『種山ヶ原』という作品の「内容」の本筋をこの場所に持つて来たものであり、内容的には、逃げた動物が「牛」から「馬」に変わったことと、もう一つは、「剣舞のこと」などが『風の又三郎』では全く語られていないのが違うところであるが、本筋は、だいたい同じような内容になっているかと思う。それでは、『種山ヶ原』という「作品」の、その「内容」を簡単に要約すると、「……種山ヶ原というのは、北上山地の真ん中の高原であり、春になると、北上の河谷のあちこちから、沢山の馬が連れて来られ、此の部落の人たちに預けられては、上の原に放たれるが、それも八月の末には、みんなめいめいの持主に戻されるのであった」。この高原は、その地形から「雲や雨や雷や霧」などは、いつでもすぐに起りやすいところなのである。

*

*

さて、夏の休みももう明日だけで、達二は、明後日から、二つの谷を越えて、再び、学校へ通うことになる。宿題は、みんな済み、蟹を捕ったり木炭を焼いて遊ぶのも、もうみんな厭きてしまった。此の夏休みの中で、一番面白かったのは、やはり「……お爺さんと一緒に上の原へ仔馬を連れに行つたことと、もう一つは、どうしても剣舞であった」とある。(つまり、宮沢賢治にとつて、子供の頃の、この高原での「体験や経験」などは、一生忘れられないほどの極めて印象深いものであったということである。……)

さて、達二は、母親に呼ばれ、兄さんが、上の原のすぐ上がり口で、草を茹けているから、弁当を持って行つてくれ。それから牛も連れてつて、草を食べさせてくれ、と頼まれ

る。そこで、達二は、静かに牛を追いながら、上の原への道をだんだんとのぼって行き、やがて高の原の入口に辿り着く。すると、兄さんがやって来て、「……よく来たな。牛も連れて来たのが、弁当持つてか。俺も少し草集めて仕舞がらな、此処らに居ろ」と言つて、また、行つてしまふ。ところが、どうしたことか、牛が俄かに北の方へ駈け出し、背の高い草を分けて、どんどん牛が走り出し、達二はどこまでも夢中で追いかけて行くが、深い霧の中、やがて途に深く迷つてしまふ。その時に、「……間違つて原を向う側へ下りれば、もうおらは死ぬばかりだ」と、半分思ふ様に、半分つぶやくようにした。それは、自分に「そう言い聞かせた」ということであり、なぜなら、自分は、今、まさに自分の「生死を分かつ場面」に直面しているというような「予感」(感じ)からである。

これは、恐らく、宮沢賢治の実際の「体験・経験」などから生じて来たその時の「心の声」であり、この高原かどこかの山で道に迷つたその「体験・経験」は、何が何でも書き残しておきたかつた。なぜなら、それは、まさに自分の「生死を分けた」不思議な「体験・経験」であり、それゆえ、『風の又三郎』の中にも、再び、登場させているのである。

さて、達二は、道に深く迷い、いつか草に倒れて眠り、奇妙な「夢」を見る。その夢の「内容」(例えば「剣舞や可愛らしい女の子或いは山男に捕われる」など)は、ここでは省略をして、まさに「悪夢」から目が覚めると、牛がすぐ眼の前に立っていたとともに、雷と「風の音」との中から、微かに兄さんの声が聞こえて来て、助かることになる。そして、お爺さんも、「……全体何処まで行つてた」と聞くと、「……笹長根の下り口だ」と兄が答える。それを聞いて、「……危いがつた。危いがつた。向うさ降りたらそれつ切りだったぞ」と言うのであつた。このお爺さんの「生の声とその言葉」は、恐らく、宮沢賢治の「頭の中」(或いは「心の中」)には、つきりと、「記録保存」されていたものに違いない。……

五、九月六日

さて、次の日、九月六日(火曜日)は、朝のうちは雨でしたが、(この雨は大事であり、あとの「葉の雫」に直結する)。三時間目の終わりにはすっかりやみやみ、あちこちに青ざらも見えてきた。耕助は、学校終えたら、「葡萄とりにはいかないか」と嘉助を誘うと、嘉助は、「三郎も行かないか」と誘う。すると、耕助は、「……あそこ三郎さ教えるやないぢや」と言うが、三郎は、「……行くよ、ぼくは北海道でもとつた」と言う。五時間目が終わると、一郎と嘉助と佐太郎それに耕助と悦治と三郎と六人で学校から上流のほうへ登つて行つた。すると、小さなたばこ畑があり、三郎は、「……なんだい、この葉は」と言いながら葉を一枚むしつて一郎に見せると、一郎はびっくりして、「……わあ、又三郎、たばこの葉とるけど専売局にうんとしかられるぞ。わあ、又三郎何してとつた」と顔をかくえて言うのと、みんなも口をそろえてはやし立てる。すると、三郎は、「……おら知らないでとつたんだい」と怒つたように言い、さっきの木の根元にそつとその葉を置く。耕助だけは、そのことをしつこくはやし立てるが、みんなは小さなみちを山のほうへと少しのぼつていくと、栗の木があちこち立って、下には葡萄がもくもくした大きな藪になつていた。「……ここおれ見つけただからみんなあんまりとるやないぞ」と耕助が言うのと、三郎は、「……おいら栗のほうをとるんだい」といつて石を拾つて枝に投げると、青いイ

ガが一つ落ちて来る。三郎はそれを棒きれでむいて、まだ白い栗を二つ取り出した。……一方、耕助は、もう一つの藪の方に行こうと一本の栗の木の下を通ると、いきなり上から雫が一へんにぎつと落ちてきて、耕助は肩から背中まで濡れてしまう。ふと上を見ると、木の上に三郎がのぼっていて、なんだか少し笑いながら顔を拭いている。「又三郎何する」と耕助は、木の上を見上げ、三郎は、「風が吹いたんだい」とくつくつ笑いながら言う。その後、耕助は、もつと葡萄を取ろうとしていると、また、頭から冷たい雫をざあつとかぶつてしまう。耕助は、「……わあい又三郎、まだひとさ水掛けだな」と強く怒る。三郎は、「風が吹いたんだい」とまた笑う。まわりのみんなも笑う。……

そうすると、耕助は、「……うあい又三郎、汝みだいな風など世界じゅうになくてもいいなあ、うわあい」と叫ぶと、三郎は、「……失敬したよ、だつてあんまりきみもぼくへ意地悪をするもんだから」と言う。しかし、耕助の怒りは収まらず、「……うわい又三郎、汝みだいな風など世界じゅうになくてもいいなあ、うわい」とまた叫ぶと、三郎は、「……風が世界じゅうになくつてもいいつてどういうんだい。いいと箇条をたてていつてごらん」と言うと、耕助は、つまらないことになったと思いつつも、「……汝など悪戯ばりさな、傘ぶつこわしたり」、「それから」、「木折ったり転覆したりさな」、「それから」、「家もぶつこわさな」、「それから」、「あかしも消さな」、「それから」、「シヤップもとばすな」、「それから」、「笠もとばさな」、「それから」、「電信柱も倒さな」、「それから」、「屋根もとばさな」、「屋根は家のうちだい、それから」、「ランプも消さな」、「ランプは、あかしのうちだい、それから」、もう言葉が思い浮かばないので、終には「風車もぶつこわさな」と言うと、三郎はこんどこそまるで飛び上がって笑ってしまう。そして、風車なら風を悪く思っちゃいけないだよ。もちろん、時々こわすこともあるけれども、回してやる時のほうがずっと多いんだと言って、また笑う。耕助も最後には一緒に笑い出してしまふ。すると、三郎もすっかり機嫌を直して、「……耕助君、いたずらをして済まなかったよ」と言い、二人は「仲直り」をする。「……さあ、それであ行ぐべな」と一郎は言いながら、三郎にぶどうを五ふさばかりくれ、三郎は、白い栗をみんなに二つずつ分けた。そして、みんなは下の途までいっしょにおりて、あとはめいめいのうちへ帰ったとある。

ところで、この「葉の雫を落とす場面」や「風など世界じゅうにと叫ぶ場面」は、最初の風の子『風野又三郎』にも出て来る内容であり、それを人間の子『風の又三郎』風に「書き直した」ものになるのだろう。……

六、九月七日

さて、次の日、「九月七日」（水曜日）は、朝こそ霧がはじめ降っていたが、二時間目以降は、日はかんかん照り出し、お午になると、一、二年生は下がり、午後は、まるで夏のようにむし暑くなった。授業がすむと、みんなはすぐ川下のほうへそろって出かけた。そこには広い河原があり、大きな「さいかちの木」のはえた崖になつている。すでに下級生たちは泳いでいて、一郎やみんなは、河原のねむの木の間を走り、いきなりきものをぬぐとすぐ水に飛び込んで、向こう岸へと泳ぎ始める。三郎もきものをぬいで泳ぎ始めるが、途中で声を上げて笑い出す。向こう岸にいた一郎は、「わあ又三郎、何してわらつた」と言い、三郎は、足をだぶだぶ鳴らして泳ぐのがおかしいと言う。（これは、自由形で泳

いでいて、その足のばたばたした状態が何かおかしいのか、それとも、三郎は、抜き手か平泳ぎで泳ぐのが普通だと思っていたのか、そのどちらかだと思うが)。その後、一郎は、「石取り」をしようと行って、丸い「白い石」を拾い、大きな「さいかちの木」に登っては、そこから白い石を「淵」へと、「落とすぞ、一二三」で下に落とす。そうすると、みんなはわれ勝ちに岸からまっさかさまに水に飛び込んで、底にある「白い石」を取ろうとするが、息が続かず浮かび上がって来る。(……だとすれば、この「淵」は、かなりの「深さ」であり)、黙って見ていた三郎ももぐり込むが、やはり底まで行けず浮かび上がり、みんなから笑われる。(この「笑い」は、一種の安堵でもあり、それは、みんなができないのに、三郎だけできてしまうのは、子供心に悔しいという競争心でもあるのだろう)。そして、この河原での「水遊び」などは、すべて宮沢賢治の子供の頃の生の「体験・経験」などを基として、それらを想い出しながら、この作品をつくり上げているのだろう。

その時、向こうの河原のところ、大人が四人、片肌を脱いだり、網をもったりしてこつちへとやって来る。一郎は、木の上から、「おお、発破だぞ。知らないふりをしてる。石とりやめて早くみんな下流さがれ」と低い声で叫ぶと、みんなは、なるべく見ないふりをしながら、砥石をひろったり、また、鶺鴒を追ったりしている。すると、向こうの淵の岸では、坑夫をしていた庄助が、あちこち見まわしてから、自利の上へすわって、やがて、腰から「たばこ入れ」をとり、「きせる」をくわえてばくばく煙りをふき出し、また、「腹かけ」から何かを出すと、みんなは、「発破だぞ、発破だぞ」と叫ぶ。庄助は、きせるの「火」を静かにそれへうつすと、うしろにいた一人はすぐ水に入って網をかまえ、庄助は、手に持ったものを、さいかちの木の下の「淵」へと投げこむと、まもなく、「……ぼおというようなひどい音がして水はむくつと盛りあがり、それからしばらくそこらあたりがきいんと鳴りました」とある。——これらは、言うまでもなく、宮沢賢治自身のまさに子供の頃に何度も直接見聞き「体験・経験」したものであり、だからこそ、このような事細かな「描写」ができて得るのである。

一郎は、「さあ、流れて来るぞ。みんなとれ」と言い、みんなはそれぞれ大小様々な「魚」を捕まえて騒いでいると、「だまつてる、だまつてる」と言う。大きな「発破の音」を聞いて、五六人の人たちが見集まって来るが、庄助は、「さつぱりいないな」と言う、なぜか、三郎は、自分が獲った「魚」(鮎二匹)を、「魚返すよ」といつて河原に置くと、庄助は、「奇体な奴だな」とじろじろと見る。みんなは、それを見て笑うが、獲った魚は、石で囲んだ小さな「生け州」の中に入れて、みんなは、上流のさいかちの「木」へのぼり始める。その頃、誰かが「あ。生け州ぶっこわすよと叫ぶと、一人、変に鼻のどがった人が、手にステッキみたいなものを持って、みんなの魚をかきまわしている。(これは恐らく、この川にはどんな魚がいるのか好奇心から見ていたのだろう)。それを見て、「あ、あいづ専売局だぞ」と佐太郎が言う。そうすると、一郎は、「……みんな又三郎のごと囲んでる」と言うが、その人は別に三郎をつかまえるふうでもなく、また、浅瀬を渡るでもなく、ワラジや脚絆をそのまま洗うというふうに、もう何べんも行ったり来たりしているので、(これは、何か鉱物などを採している姿であり、子供たちにはそれが理解できず)、だんだんこわくなり、一郎が、みんなと一緒に、「……あんまり川を濁すなよ、いつでも先生言うでないか」と言う、と、「……この水飲むのか、ここらでは」と言い、また、同じ言葉を繰り返すと、今度は、「……川はあるいてわるいのか」と言う。

その人は、結局、崖の上のたばこ畑の方へと行ってしまふ。三郎は、「……なんだい、ぼくを連れにきたんじやないや」と言つて、真つ先に淵へとび込む。すると、一人ずつ木からはねおりに、河原に泳ぎつき、そして、魚を手ぬぐいや手に持つて家へと帰つて行く。それは、河原へは「泳ぎ」に來たのであり、いわゆる「魚獲り」ではないので、バケツなどの入れ物は、何も持つていかなかったということである。

七、九月八日

さて、次の朝、九月八日（木曜日）、授業の前、みんなが運動場で鉄棒にぶらさがつたり、棒かくしをしていると、少し遅れて佐太郎が何かを入れた箆をそとにかかえてやつて來た。「なんだ」とみんなはのぞき込むが、佐太郎は、袖でそれをかくすようにして、学校の裏の岩穴のところへ行き、そこに隠した。それは、魚の「毒もみ」（水の中に魚が麻痺するような弱い毒を撒いて魚を捕る方法）につかう「山椒の粉」であり、それを使うと発破と同じように巡査に押えられる（つまり捕まる）のでした。この日も昨日と同じように暑くなり、みんなはもう授業の済むことばかり待つていて、二時になって五時間目が終わると、もうみんな一目散に飛び出しては、いつもの「さいかち淵」に着きました。みんな急いで着物を脱いで淵の岸に立つと、佐太郎は、「……ちやんと一列にならべ。いいか、魚浮いて來たら泳いで行つてとれ。とつたくらい与るぞ。いいか」。小さな子供たちは喜んで、押しあつたりしながら淵を囲みました。佐太郎は、上流の瀬に行つて箆をじやぶじやぶ水で洗いました。ところが、よほどたつても魚は浮いて來ません。また、しばらく待つても、やつぱり魚は一びきも浮いて來ません。すると、みんなはがやがやと言ひ出して、みんな水に飛び込んでしまいました。佐太郎はしばらくきまり悪そうにしていたが、やがて、「鬼っこしないか」と言つと、「する、する」とみんなは叫んで、はさみ無しの一人まげかち（これは、チョコキを使わず、グー・パーだけでジャンケンをし、例えば、グーが四人、パーが三人の場合、グーを出した四人が勝ちで抜ける。一方、負けた三人は、また、グー・パーだけでジャンケンをし、グーが二人、パーが一人の場合、パーを出した人が負けで、鬼になるというルールである）。ところが、悦治は、（誤つて）ひとりはさみを出してしまつて、（それは即負けで）、みんなにうんとはやされたほかに鬼となり、河原を走つて、喜作を押さえ、鬼は二人になる。それからみんなは、あつちへ行つたりこつちへ來たり、何べんも鬼っこをし合い、最後は、三郎一人が鬼になる。三郎はまもなく吉郎をつかまえる一方、みんなはさいかちの木の下にいて、それを見ていました。

すると、三郎は、「……吉郎君、きみは上流から追つて來るんだよ」と言ひ、吉郎は、上流から來るが、その時、上流の粘土が足についていたために、みんなの前ですべてころび、みんなは、わあわあ叫んでいる。すると、「又三郎、來」と、嘉助は、口を大きくあいて、手をひろげて三郎をばかにしました。すると、三郎は、「ようし、見ていろよ」と言つて、本氣になつて、ぎぶんと水に飛び込み、そつちのほうへ泳いで行くと、三郎の赤毛はぬれ、唇も少し紫色になつたので、子どもらはすつかりこわがつてしまふ。その粘土のところはせまく、大へんつるつるすべる坂になつていたので、三郎は、いきなり両手でみんなへ水をかけると、みんなはぼちやんぼちやんと一度にすべつて落ち、それを片つぱしからつかまえ、一郎もつかまえる。ただ、嘉助ひとりが、上をまわつて泳いで逃げたので、三郎は

鉾脈は、当分手をつけないことになったのです」と。それに対して、嘉助は、「……そう
だないな。やつぱりあいづは風の又三郎だったな」と叫びました。

宿直室のほうで何かごとごと鳴る音がして、先生は赤いうちわをもつて急いでそっちへ
行きました。一方、「……一人はしばらく黙ったまま、相手がほんとうにどう思っている
か探るように顔を見合わせたまま立ちました。風はまだやまず、窓ガラスは雨つぶのため
に曇りながら、またがたがた鳴りました」(完)とある。

*

*

まず、先生であるが、先生は、いわゆる「転校生」(山田三郎)という生徒は、まさに
「転校生」(山田三郎)とだけしか見ていないのであり、それゆえ、子供たちのように「風
の又三郎」とは全く思っていないのである。その証拠が、まさに「……又三郎って高田
さんですか」という言葉には、つきりと表れている。(これは恐らく、すべての「大人」た
ちの基本的な見方になるのだろう)。一方、五年生の「嘉助」という子供は、逆に、「……
：そうだないな。やつぱりあいづは風の又三郎だったな」と、最初から一貫してそう思い
込んでいるのである。(これはもちろん、作者がそう言わせているのである)。また、六
年生の「一郎」という子供は、基本は「風の又三郎ではない」と思っているが、しかし、
もしかしたらという想いも全くないわけではない。だからこそ、「……二人はしばらく黙
ったまま、相手がほんとうにどう思っているか探るように顔を見合わせたまま立ちました」
となるのである。それでは、これらは、一体、何を意味するのだろうか？

それは、例えば、子供の頃は、幽霊やお化けその他などが恐くて、夜、一人ではトイレ
にいけないというようなことは、よくあることではないかと思う。もちろん、そういう心
理は、大人にもあるわけだが、ここで大事なことは、まだ小学生ぐらいの子供たちであれ
ば、(例えば、漫画やアニメ或いはテレビなどの主人公やヒーローものなどをはじめ)、
子供たちは、一般に、幽霊やお化け或いは風の三郎やその他、そのようなものをとかく「信
じやすい」傾向があるのであり、しかも、「風」(特に「強い風」)などが吹けば、「……
あつ、今のは、『風の三郎』(風の又三郎)の悪戯だ！」と思うような、そういう「風土
的な環境」などがあれば、なおさらのことである。つまり、大人になると自然と消えてし
まうような、そのような子供の頃に様々な「子供の心理」というものを、宮沢賢治と
いう作家は、例えば、『風の又三郎』という作品の中でそのまま生き生きと書き残してい
るということである。

九、結び

さて、最初は、宮沢賢治の『風の又三郎』という「一つの作品」について考えるという
気持ちで読み始めましたが、結果としては、一つは、風の子『風野又三郎』、一つは、人
間の子『風の又三郎』、それに加えて、一つは、『種山ヶ原』^{たねやま}、そして、もう一つは、『さ
いかち淵』^{ふち}という、いわば「四つの作品」についての考察になってしまったわけである。

まず最初は、『風野又三郎』という作品であるが、この「作品」は、まさに百%風の子
「風野又三郎」として描かれていて、その主人公である「風野又三郎」というのは、文字
通り、まさに「風の子供」であり、それゆえ、親兄弟叔父さんその他もいる「風の家族」
の一員であり、その「風の家族」は、一年中、まさに「世界中」をずっと風を吹かせなが

ら「旅」（旅行）をしていて、日本へは、毎年、九月一日の二十日から二十日までやって来ているという設定になっている。そして、その本文の「内容」も九月一日から十日までの、主に放課後、丘の「栗の木」の下に集まって来る子供たちに、主人公の「風野又三郎」が、風の子として世界中を「旅」（旅行）した時の実に様々な「体験・経験」などを楽しく話をするという内容であり、それらの詳しい「内容」については、本文を読んでもらえば、それで十分であり、それゆえ、ここでは省略したいと思う。

次は、『風の又三郎』という作品であるが、この「作品」は、基本は、まさに転校生・人間の子「高田三郎」という「設定」に書き換えながらも、もう一方では、いわゆる風の子「風野又三郎」という特徴をもある程度は残した（或いは「残したかった」ということである。それでは、なぜ、そのようなことをしたのか？ それは、次のようなことである。——つまり、自然界において、風は、多かれ少なかれ、必ず、吹いているものであり、強く吹く時であれば、また、弱く吹く時もあり、その結果として、様々な悪戯いたずらをすることもある。だとすれば、風の子「風野又三郎」は、姿は見せなくとも、絶えず存在していることになる。つまり、風の吹くところには、必ず、風の子「風野又三郎」は、存在しているのであり、それゆえ、風の子「風野又三郎」を完全に排除することはでき得ないとともに、いわゆる「風」（特に「強い風」）などが吹けば、その地域の小さな子供たちは、自然と、「……あつ、今のは、風の子『風野又三郎』の悪戯いたずらだ！」と思うような「風土的な環境」もあつたかと思う。それゆえ、今度の『風の又三郎』という「作品」の主人公に最もふさわしいのは、一方では、転校生、つまり、人間の子「高田三郎」であるとともに、一方では、突然、どこからともなく「姿」を現わし、また、どこへともなく消えて行く、そういう、小さな子供たちから見れば、まさに風の子「風野又三郎」的な特徴をも兼ね備えた、そういう、まさに新しい主人公の「風の又三郎」にしたかったということである。

そして、このような「話」は、実際に幾らでもあり得る「話」であり、例えば、或る山深い「山村」の小学校などに、都会からの「転校生」などが突然やってくれば、地元の子供たちの間では、必ず、なんだかんだと話題になるとともに、その子供の何か特徴ある「姿・形すがたかたち」や「言動」などから、何らかの「あだ名」などを付けられることも多く、例えば、風が強く吹いた瞬間、突然、「……ああわかった、あいつは風の又三郎だ」と誰かが叫べば、それがそのままその子の「あだ名」となりやすく、また、小さな子供たちも、それをそのまま信じてしまうような傾向は、少なからずあるということである。

そして、『風の又三郎』という作品をよくよく丁寧に読んでみると、その「内容」は、大きく「二つ」に大別されて、その一つは、まさに学校での「授業風景」その他であり、そして、もう一つは、まさに放課後の「子供同士の遊び」その他であり、あとは「自然」が描かれているだけである。これは、一体、どういうことかと問えば、それは、結局、この「二つのもの」（或いは「自然」をも含めた「三つのもの」）をできるだけ生き生きと描いておきたかった。——つまり、第二期の「人間形成期」（それは「小学校時代」《学童期》）というものを、その現実の「生のままの子供たち」というものをできるだけ生き生きと描いておきたかった。つまり、「作者」（つまり「宮沢賢治」）は、自分が子供だった頃を「想い出」しながら、その子供の頃になりきった「目線」で、その現実の「生のままの子供たち」をできるだけ生き生きと描いておきたかった。なぜなら、それは、自分の子供の頃のまさに「原風景」（或いは「原体験」）そのものであるとともに、自分の「人

間形成」の「原点」そのものでもあるからである。そこで、「作者」（「宮沢賢治」）は、自分の子供の頃の「体験や経験」などを踏まえた「作品」であつたであろう、有名な『種山ヶ原』や『さいかち淵』その他などを、まさに「ここに持つてきた」ということである。

つまり、この二つの『種山ヶ原』や『さいかち淵』という作品は、「作者」（「宮沢賢治」）自身、自分の子供の頃の「体験や経験」などを踏まえた「作品」であり、それゆえ、十分「手応えを感じていた作品」であつたに違いなく、いつかどこかで使いたいと思つていたかも知れない。それはともかく、『種山ヶ原』という作品は、まず、「種山ヶ原」の説明から始まり、それは、北上山地の真ん中の高原であり、春になると、北上の河谷のあちこちから、沢山の馬が連れて来られ、此の部落の人たちに預けられては、上の原に放たれるが、それも八月の末には、みんなめいめいの持主に戻されるのである。この高原は、その地形から「雲や雨や雷や霧」などは、いつでもすぐに起りやすいところなのである。

そして、達二は、母親に呼ばれ、兄さんが、上の原のすぐ上がり口で、草を茹つているから、弁当を持って行つてくれ。それから牛も連れてつて、草を食べさせてくれ、と頼まれる。そこで、達二は、静かに牛を追いながら、上の原への道をだんだんとのぼつて行き、やがて高の原の入口に着き、兄さんと出逢うが。すぐ別れる。その後、どうしたことか、牛が俄かに北の方へ駆け出し、その逃げた牛を夢中で追いかけているうちに、やがて、深い霧の中、途に深く迷つてしまう。そして、その「途に深く迷つた様子」が実に事細かに書かれているが、それは、まさに子供の頃に経験した、その「記憶」を思い出しながら書いているからこそ、実に事細かな「描写」になつて行くのである。そして、この「途に深く迷つた経験」は、いわば「自分の生死」を分けた、一生忘れることのできない極めて印象深いものであり、それゆえ、何が何でも書き残しておきたかつたということである。それは、『さいかち淵』も全く同じことであり、子供の頃、この「さいかち淵」で友だちと遊んだことは、何よりも楽しい「思い出」であつたに違いなく、それゆえ、何が何でも書き残しておきたかつた。そのために、まさに風の子「風野又三郎」から人間の子「風の又三郎」へと書き換えたと言つてもよいほどである。つまり、「作者」（「宮沢賢治」）という人は、今までのような子供相手のおとぎ話的な「童話」作品だけではだんだんと物足りなくなり、もつと現実の「生のままの子供たち」というものをできるだけ生き生きと描いてみたくなつた。つまり、「作者」（つまり「宮沢賢治」）という人は、自分が子供だった頃を「思い出」しながら、その子供の頃になりきつた「目線」で、その現実の「生のままの子供たち」をできるだけ生き生きと描いておきたかつた。なぜなら、それは、自分の子供の頃のまさに「原風景」（或いは「原体験」）そのものであるとともに、自分の「人間形成」の「原点」そのものでもあるからである。

以上、最初は、宮沢賢治の『風の又三郎』という「一つの作品」について考えるという気持ちで読み始めましたが、結果としては、一つは、風の子『風野又三郎』、一つは、人間の子『風の又三郎』、それに加えて、一つは、『種山ヶ原』、そして、もう一つは、『さいかち淵』という、いわば「四つの作品」についての考察になつてしまつたということである。

*

*

「参考文献」

- ※ 底本「青空文庫」(「注文の多い料理店」宮沢賢治著)
- ※ 底本「青空文庫」(「注文の多い料理店」序・宮沢賢治著)
- ※ 底本「青空文庫」(「風野又三郎」宮沢賢治著)
- ※ 底本「青空文庫」(「風の又三郎」宮沢賢治著)
- ※ 底本「青空文庫」(「種山ヶ原」宮沢賢治著)
- ※ 底本「青空文庫」(「さいかち淵」宮沢賢治著)